
あなたを愛する人

篠原 柑那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたを愛する人

【Nコード】

N0813V

【作者名】

篠原 柑那

【あらすじ】

半年前にAPT4869の解毒剤が完成し、工藤新一たちは高校3年生になった。ある日、新一と蘭はささいなことではんかをしてしまう。しかしこれは、これから起こるものの序章にしかすぎなかった。 新蘭（平和）

第1話 発端

江戸川コナンから工藤新一に戻って1年がたち、周りも大分落ち着きを取り戻してきていた。

新一たちは3年生になり、今日も進路の話で盛り上がっていた。

「園子は将来何になりたいの？」

「あたし？あたしは…キッド様の恋人になることかな〜！」

「も〜真面目に考えてよね！新一は？」

「決まってるんだろ。俺は…」

「平成のシャーロックホームズ、でしょ？」

新一の言葉を遮り園子が割り込む。

びつくりして、目が丸くなってる新一を見て
蘭と園子は爆笑していた。

「蘭はどうなのさ？」

「え？」

「そーだよ。お前、人のことばっか聞いて自分はどつなんだよ？」

「わ、わたしは…」

新一のお嫁さん、そう頭に浮かんでしまった。
とたんに顔が赤くなる。

「あー！！！！蘭は新一くんのお嫁さんでしょー！」

「はっ！？」「」

声が重なる。

「まあそつに決まってるわよね！それに結婚はオンナノコの永遠の夢！！その相手といったら…」

「なっ何いってんのよ！こんなやつだれが…っ」

「へえ…嫌なんだ？」

しまった。そう思ったときには遅かった。

「俺が蘭のこと好きなのは本当だけど、お前は違うんだ？」

新一のあまりにも冷たい表情に蘭と園子は息を飲む。

「し、新一くん？蘭はただ照れてるだけよ…！だから…」

「…もついい。」

新一は蘭と園子を残して学校へと走っていった。

第2話 後悔

「どーすんの？蘭！」

「どーすんのって…」

新一と蘭がけんかをするのは今までに何度もあった。
たいてい真っ先に怒るのは蘭であって、新一が先に怒ることはめったになかったため、蘭は驚きを隠せないでいた。

「ひどいことゆっちゃったなあ…」

そう言った蘭に園子は小さく微笑む。

「あら？随分素直じゃない？」

「だって…」

（悪いのはすべてわたし。新一は悪くない。）

黙り込んでしまった蘭を見て、園子は蘭の頭に手を乗せた。

「大丈夫よ！いつもみたいに仲直りできるから！」

すっかり涙目の蘭に苦笑した。

（まったく、この夫婦は…）

「くそっ！！！」

新一は壁に思い切り拳を打ち付けた。

（俺のこと好きじゃねえならそう言えっの！！）

ふう、と息をついてからその拳を自分の額にもってきた。

（少し、言い過ぎたかな。）

ここ最近、体の調子がよくない。

それに対しての苛立ちをやつ当たってしまったのかもしれない。

もう一度息をついてから、いつもより大分重く感じる体を動かした。

（こんなんで蘭に会えねえよな…）

こんな苛ついた状態で会ってもきつとまたやつ当たってしまう。

学校なんて、行けない。

新一は自宅へと向かって歩き出した。

第3話 事実

「新一くんこないね。」

「そだね…」

新一が来ないことを心配した園子が声をかけてきた。

「だいたい新一くんも新一くんよ！！あんなの冗談だってくらい誰にだって…」

「やっぱりちゃんと告白の返事してなかったのがいけなかったかなあ…」

いきなりの衝撃発言。
園子は思わず目を丸くした。

「何！？あんた告白されて半年もたってんのにまだ返事してなかったの！？」

「だって無理よ……！告白の返事なんてそんな簡単にできるものじゃないじゃない……！」

それがこのけんかの全ての原因だ。

そう蘭に言おうと思ったが今さら言ってもどうにかなるわけではない。

それに蘭がこれ以上落ち込んでしまっても困る。

園子は「はあ……」とため息をついた。

「今すぐ電話して、『わたしも新一が好き』ってゆっちゃいなよ？」

「ええ！？」

蘭の顔が真っ赤になる。

「そうでもしないと、新一くん許してくれないかも……」

「そんなっ！いきなりは無理！！！」

ぶんぶんと手を振る蘭に、園子は再度ため息をついた。

「ねえ蘭…そんなんじゃない、いつまでたってもそのままよ？」

「……………うん。」

その園子の言葉が蘭の心に重くのし掛かっていった。

第4話 決意

『そんなんじゃない、いつまでたってもそのままよ?』

園子の言葉が何度も頭をよぎる。

(ちゃんと伝えなきゃ。ずっとこのままなんて、いや。)

何度も思った。

しかし、ちゃんと行動に移せる自信がない。

『好き』という、たった二文字の言葉を発することが、こんなにも勇気のいることだとは知らなかった。

半年前の告白を思いだし、改めて新一の強さを知った。

(どんなに変な言葉になったっていい。時間がかかったって、いい。

全部伝えよう。
)

——わたしも強くなりたいから。

そう決意し、鞆から携帯を取り出した。

T O 新一

話が見たい。

学校終わったら新一の家行くね？

F r o m
蘭

H R が終わるころ、新一は1人家にいた。

先ほどから貧血のような症状がずっと続いている。

もともと悪かった体調が悪化してしまったのかもしれない。

（こんなことなら最初から学校休んどけば良かったな…）

そうすれば蘭とけんかすることもなかった筈だ。

そう思ったときだった。
携帯のバイブが鳴った。

To 新一

話がしたい。学校終わったら新一の家行くね？

From 蘭

（蘭…？）

驚いた。蘭からメールがくるなんて思ってもみななかったから。

（話…ってなんだ？）

話をしなければいけないのはこっちの方だ。今回のことを謝らなければいけない。
蘭からの話なんて想像ができない。

あれこれ考えているうちに、また目眩が起こる。

「——っ」

額に手をあてる。いつもよりも高い温度に、風邪をひいたのだと判断した。

（少し、休むか…）

新一は自室へと向かった。

第5話 不安

いつのまにか新一は眠ってしまったていたらしい。気がついたら時計の針は4時30分をさしていた。

（もう蘭が来る頃だな…）

心臓が、壊れそうなぐらい激しく打っている。
また蘭を傷つけてしまわないか、不安だけが何度も何度も頭をよぎる。

喧嘩なんて久し振りで、謝り方なんかを考えてしまう。

少し情けなく感じて、笑った。

——ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。

新一は静かに息を飲んだ。

蘭は新一の家の前に立っていた。
チャームを押せずに、押そうとする。

（ここまで来たら、もう後戻り出来ないよね…）

新一の家に行く決めてから、蘭もまた新一とは別の不安を抱えていた。

うまく言えなくて、また新一を怒らせるのではないか。

怖い。

それでも、前に進むのを決めたのは自分自身だ。

蘭は深呼吸をしたあと、震える手でチャイムを押した。

——ガチャ

ドアが、ゆっくりと開いた。

第6話 素直

チャイムが鳴ってゆっくりとドアを開けた。

そこには蘭がいて。

「ら、蘭…」

「あのねっ新一…」

「とりあえず、入れよ。俺も話あつから…」

「う、うん」

二人は沈黙した状態のまま新一の部屋へと向かう。その途中で一方が口を開いた。

「蘭、今朝…悪かった。言い過ぎたって反省してる。ほんと…ごめん。」

蘭は、突然の新一の言葉に驚き目を丸くする。

「え…？」

「俺は、ずっと蘭の好きだから…だからお前が俺のこと嫌いでも…」

そこまで言って新一はぎょっとした。

蘭が泣いている。

「お、おい！泣くなよ。お、俺変なこと言ったか？」

蘭は何度も首を振る。

「嫌いになんてならないよ！！あたし…新一が好きだよ。大好き…
っ。」

やっと、素直になれた。

そう思ったときだった。

「ほんと、ずっとこうしたかった。お前のことずっと想ってたか

ら…」

優しく、蘭を抱きしめた。

真っ赤になって泣いている蘭に、新一は少し笑った。

「ちゃんと言葉で聞けて良かった。俺ずっと待ってたんだぜ？」

そつと蘭の頭を撫でてやる。

蘭は次々流れる涙を止めることができなかった。

心にたまっているすべてのものがやっとな滅したように感じて。

新一は、蘭の涙が止まるまで抱きしめた。

第7話 異変

「コーヒーでいいか？」

「うん。」

新一は手慣れた様子でコーヒーを入れる。
ぽーっとその様子を見ていた蘭の目の前にカップが手渡される。

「落ち着いたか？」

「う、うん。ごめんね。」

蘭が落ち着くまで30分の時間を要した。
その間ずっと側にいてくれた新一に対して、嬉しさを感じながらも少し申し訳なさを感じていた。

「謝るなよ？もうやめようぜ。苦手なんだよ、こつゆつの…」

そう言っただけで新一は黙ってしまっ。

「うん…！」

蘭は新一が座っているソファアの隣に座った。少しの沈黙の後、蘭が口を開いた。

「あっあのね、新一…」

——ガシャン

蘭の言葉を遮るように、コーヒーの入ったカップが床に落ちる。新一のカップが。

「し、新一？どしたの！？新一っ！！！」

額を片手でおさえてうつむいている。

「な…んでも…な…」

言い切る前に新一の体はゆっくりと床に倒れていった。
慌てて蘭は声をかける。

「新一！？新一っ！！！」

いくら叫んでも返事が返ってこない。
新一の額に触れると予想以上の熱を感じた。

携帯を取りだし、119を押そうとする。
しかし何度打つても押し間違えてしまう。

さっきとは違う、手の震え方が自身を苛立たせた。

「どうですか？新一の具合…」

「今は眠っています。熱も大分下がってきたので大丈夫ですよ。」

病院に着いたところで、ようやく事態が落ち着いた。

運ばれた直後は40度を越える熱があった。それが下がってきたと聞いて蘭は安心した表情を見せた。しかし、医者表情は曇った。

「ど、どうかしたんですか？」

「熱は下がったんですが、この高熱の原因がまだわかっていなくて…」

てつきり風邪をこじらせたのだと思っていた蘭にとって、医者その発言はとても不安になるものだった。

「工藤くんが目を覚ますまで、ついていてもらえますか？少しでも体調が変化するようだったらすぐに教えてください。」

そう言つて医者は病室から出ていった。

蘭の不安は徐々に大きくなるばかりで、どうしようもない思いがただただ蘭を苦しめた。

第8話 覚醒

医者との会話から3時後、新一がようやく目を覚ました。

「新一…っ!」

「ら…ん…?」

目を開けると、そこには笑みを浮かべた蘭がいた。起き上がろうとするが、体が言うことをきかない。

「…どこ?」

「米花総合病院だよ。今先生呼んでくるから…」

そう言って蘭は病室から出ていった。

「熱は…38度2分か。検査は明日しましょう。今日はここでゆっくり休んでください。」

「はい、ありがとうございました。」

医者が出ていくと同時に蘭が入ってきた。

「具合…どう？」

「あ、ああ大丈夫。」

「…心配した。」

「おっおっ…悪かった…な…」

最初は笑顔で入ってきた蘭だったが、だんだんとしゅんとした表情になっていった。

「具合…ずっと悪かったんでしょ？どうして言ってくれなかったの？」

「言うほどじゃなかったから…」

本当は辛くて堪らなかったのだが、蘭に心配だけはかけさせたくなかった。

「それでも！現にこうなったんだから…次からはちゃんと言ってね…？」

「…おう」

小さめの声で返事を返した。

熱が下がったと言っても、平熱に戻ったわけではない。先ほどの高熱で体力が落ちきっている新一にとって、体を起こしていられるのには限界があった。

顔色が悪くなってきたのを見て、蘭は何も言わずに新一をベッドに寝かしつけた。

新一は抵抗する力もなく、そのまま眠りについた。

新一が眠ってしまったあと、蘭は新一の病室にいた。今まで普通にしていた新一が、眠ったとたんにつらそうな表情を見せた。

（まったく、人の話なんにも聞いてないんだから…）

そう言っ、ふう…とため息をついた。
新一の傍に寄る。そしてそつと手を握った。

（もう…どこにも行かないよね？新一…）

それが一番の不安だった。

自分の前から新一がいなくなってしまうことが、怖い。

蘭は握っていた手をさらに硬く握った。

「もう、一人はいやだよ…ずっと傍にいて…っ」

気がついたら、蘭は声に出していた。止まらない涙が新一の手にも落ちる。

すすり泣く声が、病室に響いていた。

第9話

涙痕

「ん……」

目覚めるとそこにはぐっすりと眠った蘭がいた。
新一が体を起こそうとしたとき自分と蘭の手と手が繋がれていることに気づく。同時に蘭の頬の涙の痕に気づいた。

（蘭…）

新一はそっと蘭の頬に触れる。

「じめんな……」

小さく呟く。

その時、蘭の手がぴくりと動いた。

「ん…しんいち？」

驚いて、慌てて頬から手を離れた。
顔が熱い。見られたくなくて、横を向いた。

「大丈夫？ 具合…」

「ああ…」

「本当の本当に…？」

「大丈夫だよ。」

蘭の視線が痛い。
しかしそれはすぐに優しい笑みへと変わる。

「よかったあ…！」

へへつと笑ってから、蘭はさりげなく頬の涙の痕をぬぐった。
新一はそれを見逃さなかった。

「蘭…」

「ん？」

「俺さ、お前の本当の笑顔が見たいよ。もう…泣くな。」

その言葉に蘭はギクリとする。

「泣いてないよ…？」

笑ったつもりだった。しかし涙が溢れて止まらなかった。

その瞬間、体が引き寄せられた。新一が蘭を思い切り抱きしめる。

「もう、泣かせない。俺がお前を守るから…」

蘭は新一の腕の中で、泣いた。重い重い鉛のような不安を、すべて吐き出そうとするように。

第10話

検査

翌日、午前中に検査を受けることになっていた。

土曜日であつたため蘭は部活があるからと、学校へと向かった。

本人は行かないと言っていたけれど、どうしても検査結果と一緒に聞きたくなかつた。

だから無理に行かせた。

11時、一通り検査を終わらせた新一は病室待機と言われ、一人病室にいた。

「——っ」

また、だ。ここに運ばれる前にもこんなめまいを感じた。固く目を閉じ耐える。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「……どつぞ」

小さく返事すると医者が入ってきた。

「大丈夫かい？工藤君。顔色が悪いようだけど…」

「大丈夫です。…検査結果ですか？」

「ああ…」

少し間があつてから、慎重そうに口を開いた。

「検査結果、体のどこにも異常はみられなかった。だが君の症状みる限り、これはあり得ないことなんだよ…」

この言葉を聞いて新一は確信していた。

「…APT X 4 8 6 9」

「——っ」

新一が突然発した言葉に、医者は顔をひきつらせた。

「き、君どうしてその名を…」

組織壊滅後、A P T X 4 8 6 9 の名は医療機関すべてに公表された。しかし、裏を返せばそれ以外の国民は知っているはずがないということになる。

なぜこんな子供が知っているのだろうか。

「…どこで聞いたんだい？」

「聞いたんじゃない。被害者なんです。僕は…」

理解が出来ない。その薬は『人を死に至らす』ものだと思っていたから。

「まさか…だって君は…」

「…例外もあるんです。」

新一は一息ついてから続けた。

「この薬が医療機関に公表されたことは知っていました。でもそれは人を死に至らせる危険な薬物、としてでしょう。例外があるんですよ…」

「……………」

医者 は 息 を 飲 ん だ 。

「…幼児化したんです。小学1年生のような姿に。まあ、半年前に解毒剤が完成して元に戻っているわけですが…」

「ちょっと待て、じゃあ君はそんな危険な毒薬を二度も飲んだっていうのか…?」

突然口を挟んできた医者 に 新一 は 驚 いた 。

「ま、まあそういうことになるかと…」

そう言った新一を、医者は軽く睨んだ。

「わかっているのか？そんな作用が大きい薬は…」

「…副作用」

言葉を切った。

医者は一瞬言葉を詰まらせた。けれど、慎重に続けた。

「君は…知っていたんだな……」

表情を隠すかのように、新一は俯いた。

第11話

連鎖

12時、部活の終わった蘭は園子の所属しているテニス部が終わるのを待っていた。

しばらくして園子が走ってきた。

「ごめん蘭!!遅くなった!!」

「大丈夫だよ。じゃ行こっか？」

部活が終わったら二人で新一のいる病院に行く約束をしていた。

「まーったく!!昨日までけんかしてたと思ったらもう仲直りしたなんて…」

「まあまあ…」

適当に返事をする、園子がニヤニヤしながらこっちを見ていた。

「それで?その後二人はどうなったのかなー?まあ聞かなくてもわ

かるけど！」

「もう！！園子ったら……」

そんな会話をして二人は笑った。だが話題が変わるにつれ、真剣な表情へと変わった。

「それにしても、新一くんが原因不明の高熱で倒れたなんて……」

「うん……」

「今日の午前中検査だったんでしょ？ついてなくてよかったの？」

「だって追い出されちゃったんだもん……」

次第にしゅんとなる蘭を見て、園子は蘭の背中を叩いた。

「まっどうせ今から行くんだから問い詰めればいい話！！どーせたいしたことないから大丈夫よ！！！」

「……うん。そう、だよね！！あっそうそう、そういえばね……」

話題を変えた。
きつとまた不安になる。

蘭はさっきよりも速く歩き出した。

「新一。入るよ?」

そう言つてドアに手をかけた。しかしすぐにその手は止まり、開けるのをためらつた。

『…副作用』

『君は…知っていたんだな……』

なにやら深刻そうな話に蘭は戸惑うばかりだった。

(なに...?どういふこと...?)

ドアにかけた手を、思わず止めてしまった。
園子が不思議そうに話しかけてきた。

「らん?どしたの?」

「.....」。

「蘭!..!」

「えっ!あっううん、なんでもないよ...」

「もう!新一くん!!入るよー!!」

「あっちょっと!」

蘭が止めるのを聞かずに園子は勢いよくドアを開けた。

「え、園子!？」

驚いて声をあげた新一に、医者は少し笑って言った。

「ああ、友達かい?じゃあこの話はまた今度に…君にはしばらく入院してもらうことになるが、いいね?」

「…はい、わかりました。」

新一の答えに安心したような顔をして、出ていった。

きちんとドアが閉まったことを確認して、蘭が勢いよく新一を問う。

「ちょっと新一!?!入院ってどういうことよ!?!」

「あ、いや別に…」

「別について何よ!?!検査結果そんなに悪かったの…?」

「や、そーじゃねえよ…」

そこまで言って園子が口を挟んだ。

「新一くん！ちゃんと本当のこと言っ
て。蘭には知る権利がある
わ。」

園子は睨むように新一を見た。

新一は、「はあ…」とため息をついて言った。

「わかったよ…」

そして、すべてを静かに話し始めた。

第12話

現実

新一がすべてを話し終えた後、長い沈黙があった。
最初に破ったのは蘭だった。

「し、新一はどうなっちゃうの…？」

蘭が俯く。新一はためらったあと、静かに言った。

「俺にもわかんねえよ。昨日よりもっと高い熱が出たり、体が動かなくなったりするかもしれない…もっと酷ければ…」

そこで一度切った。

汗が、背中を伝うのを感じた。

新一は絞り出すように言う。

「死。」

一気に蘭と園子の顔がひきつる。

「で、でもまだそれは仮説でしょ？そうと決まったわけじゃ…」

蘭はもう何も言えないでいた。園子が問う。

うん、という返事が返ってくると信じて。

しかし、新一は首を横に振った。

「A P T X 4 8 6 9 は、もともと人が死ねるほどの毒性を持った薬物だ。即効的でなく、副作用として出てもおかしくはない。」

「そんな…」

園子までもが言葉を失った。

その時だった。

今まで真剣な表情をしていた新一が、突然ニカッと笑った。

「心配すんな。俺は死んでも死なねえから…」

その言葉で二人に笑顔が戻る。
その言葉を本気で信じたから。

だから、

新一が、どうしようもなく死への恐怖を感じていたことを

笑っていた新一の手が小さく震えていたことを

まだ知らなかった。

しばらくたわいもない話をして、二人は病室を後にした。

「じゃあ新一！また明日くるから！！」

「おう。わりいな。」

「新一くん！いつまでも蘭に心配かけさせてんじゃないわよ！？」

「わかってるよ……」

その園子の言葉に苦笑した。

二人が去って、病室は静まりかえっていた。しばらくして医者が入ってきた。

「今いいかい？」

「いいですよ。」

「…さっきの話だけど」

「ああ…」

空気が変わる。

さっきまでの明澄な雰囲気は
今は思い出せない。

「情報が欲しい。薬のこと、何も知らない状態では困る。」

無愛想。今の医者には適切な言葉だ。
新一もそれ相応な態度で返した。

「薬のデータを、完全ではないですが持つてる奴がいます。」

「なに!？」

「元組織の一員で…」

『灰原哀』

知っている限りを話した。

話が進むのに比例するように医者顔が陰しくなっていく。
躊躇することもなく、延々と話し続けた。

「聞いてます？ 僕の話…」

非現実的な話を当たり前のように入れるのには時間がかかる。
医者は呆然としていた。

「…全部理解できているかは微妙なところだが…」

「まあとりあえずはいいです。それでデータの件ですが…」

「ああ、早いうちに借りられたら良いんだが…」

「わかりました。」

「じゃあよろしく、と言って医者が出ていこうとした。が、その足が止まった。新一の方を見て何か言いかけた。」

「なんですか。」

「…わたしなりに努力はする。しかし、もうすでに手遅れかもしれない。覚悟を決めたほうが良いかもしれないね…」

『死』への覚悟。

新一が今一番聞きたくない言葉だった。

数秒俯いて、また顔を上げる。

「無理ですよ。俺には『死なない覚悟』があるんでね。」

医者はその言葉に驚いたような顔を見せ、またなにか言おうとした。しかしそれは放たれることなく、医者は小さく笑って出ていった。

あんな台詞。

——強がりだ。

本当の自分を隠し続ける。

滑稽だと、思った。

第13話

情報

「さて、と、灰原に連絡しねーとな」

そう言って公衆電話へと向かった。その足がだんだんと早くなっていく。

『覚悟』を『確信』へ、一刻も早く変えるために。

——RRR…

『はい、阿笠です…』

「灰原か？」

『工藤くん？どうしたの？公衆電話からかけてくるなんて…』

「ち、ちよっとワケありで…」

ふーん…と素っ気ない返事が返ってくる。

新一は一度息をついてから、さっきとは違う、静かな声で言う。

「それで本題なんだけど…APT X 4 8 6 9 のデータが必要なんだ。持ってこれねーか？」

いきなりAPT X 4 8 6 9 の名前を出され、哀の顔が多分険しくなる。

「ええ、平気だけど。何に使う気？」

何にと言われて、新一は困った。

副作用が出た、なんてあまり言いたくなかった。哀自体いい気はしないだろうし、解毒剤が原因だとしたらコナンに戻され兼ねない。

「それは…来てから話す。」

「…わかったわ。じゃあすぐ行くから…ってあなた今どこにいるの？」

「…米花総合病院。」

『6時くらいには着くと思うから…』

「ああ。外で待つてる。」

そう言つて電話を切つた。
時計を見ると4時をさしていた。

（まだ時間あるな…）

新一はのろのろと病室へ戻つた。

6時、哀は丁度に来た。

「灰原あ。」

新一が手を振ると、それに気づいて走ってきた。

「はい、これが例の…」

「ああ、ありがとな。」

「それよりあなた、どうしてこんなところにいるの？」

哀はずっと疑問に思っていたことを口にした。

最初は事件絡みなんだろうと思っていたが、服装を見るなりそんな感じはしなかった。

「あ、いや俺今入院中で…」

「え…まさかAPTX4869のデータが必要なのって…」

その先はお互い言葉に出来なかった。

長い静寂のあと哀が口を開く。

「ごめんなさい…わたし…」

今にも泣きそうな哀を見て、新一は慌てて言う。

「べ、別にお前のせいじゃねーよ。」

「でも…っ」

「心配すんな。大丈夫だから…」

そう言うのが精一杯だった。

「そのデータ、医者に頼まれてんだ。しばらく貸しててもいいよな？」

「ええ、もちろん。」

ありがとな、と言って新一が軽く微笑んだ。少し、切なそうに。

「あ、あの…工藤くん…」

「ん？」

哀は言いづらそうに口を開く。

「死なないで。絶対に…」

この事態を、たった今知った哀は、新一の状態をすべて把握しているわけではない。

それでも、『死なないで』と言った。

「おう。」

——死なないために、どうしたらいい？

そんな考えを隠して、新一は笑った。

第14話

解放

「先生！」

哀と別れてから、新一は医者を探していた。

「工藤君。急にいなくなったから心配したよ。」

「すみません。これ……」

新一はデータの入ったディスクを渡した。

「早いな……すごい行動力だ。」

「いえ、それほどでも……」

ははは、と新一が笑う。
その瞬間、再びめまいが新一を襲った。体を支えきれなくなり、ド
アに手をつく。

「――っ」

「おい！大丈夫かい！？」

医者の手が新一を支える。
荒い息のまま新一が答える。

「大…丈夫です。それより…先生にお願いがあるんですが…」

「なんだい？」

呼吸を整えてからゆっくりと言った。

「明日…一日外出許可をいただきたいんですが…」

新一の言葉に医者は首を横に振った。

「駄目だ。そんな体で外に出せるわけないだろう。だいたいなんのために…」

「体が動くうちに…しとかなきゃならないことがあるんです。」

医者の言葉を遮るように言った。

弱々しくも、強く。

「…わかった。しかし明日の体調を見てからだ。いいね？」

「ありがとうございます。」

「とりあえず、今は休んだ方がいい。歩けるかい？」

医者は新一を病室に入れ、ベッドに寝かせた。新一は間もなく意識を失った。

しばらくして新一が目を覚ました。大分体が軽い。ふと自分の腕を見ると痣ができていた。それを見て今まで点滴を打っていたことに気づく。

時計の針はすでに9時をさしていた。新一はゆっくりとベッドから降り、公衆電話へと向かった。受話器をとり、蘭の携帯へとかける。

——RRR…

『はい。』

「蘭か？俺だ。」

『新一！？どしたの？』

驚きながらも嬉しそうな蘭の声が聞こえてくる。

「お前さ、明日なんか予定あるか？」

『え？別にないけど…』

「明日出掛けねーか？」

『ええ！？でも…』

一瞬すごく嬉しそうな声が聞かれた。しかしその声もすぐに曇る。

「外出許可ならとったよ。だから…」

『行く!!!!』

自分が言い切らないまま蘭の声が響いた。

『園子とかも誘おうよ!!瑛祐くんとか!!!!』

「…ちげえよ。」

新一がポツリと呟く。

『え?』

「だから、デートに誘ってただよ!!それくらい気付け!!」

新一の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

『そっそれは二人だけってこと…だよね？』

「当たり前だろ？嫌ならいいけど…」

『明日っ！！む、迎えに行くから！！』

電話の向こうで、おい蘭顔赤えぞという小五郎の声が聞こえてきた。

「じ、じゃあ明日待ってるから。」

そう言って切ろうとした、時だった。

『新一!!』

電話の向こうで声がした。

『明日…楽しみにしてるね。』

そして、電話が切れた。

第15話

出発（前書き）

今まで書いてなかったんですが
季節は春です。

てゆか5月くらい…かな？

第15話 出発

「熱は…37度4分か。体調はどうだい？」

「…平気です。」

「じゃあ外出を許可する。が、体調が悪くなったら…」

「わかってます。ちゃんと帰って来ますから…」

そこまで会話して、突然医者がニヤニヤしだした。

「な、なんですか…」

「デートなんだろう？彼女と…」

その言葉に新一はどきつとする。

「なんで…」

「昨日電話してただろ？顔真っ赤にしながらデートに誘ってる男の子がいるってね、看護師に聞いたんだよ。」

医者は楽しそうに言う。

（見られてたか…）

返す言葉もなくそっぽを向いてしまう。再度顔を赤くして。そんな新一にお構い無く医者は言った。

「門限は9時。ま、しっかりやれよ。」

そついつて肩に手を置いて出ていった。

新一は、はあとため息をついてベッドに座った。

「デート…ね。」

考えてみれば、デートらしいことをしたことしたのは一度もない。そのため新一は少し緊張していた。

あれこれと考えているうちにドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ。」

「新一？入るよ？」

蘭だ。しかし約束の時間まで、まだ大分時間がある。そう思っているうちにゆっくりとドアが開いた。

「おはよ！新一！」

「あっおっ…」

思わず見とれてしまった。

原因はその格好にあった。

さくら色のふわりとしたワンピースに白いパンプス。いつもはまっすぐに垂らしている髪も少し巻いていた。若干化粧もしている。

「変…かな？」

「いや…」

素っ気なく言った。蘭には悪いと思ったが、声を出すので精一杯だった。

そんな新一を気にかける様子もなく蘭が話しかけた。

「どこ行こっか？」

「ら、蘭は行きたい場所とかねーのか？」

「んとね……じゃあさ……！」

——長く、短い一日が始まる。

第16話 印

「お前…行きたい場所ってここかよ。」

「うん！そーだよ！！」

新一と蘭は近くのショッピングセンターに来ていた。

「あたし買い物したかったの！新しい服とか欲しかったし。いいでしょ？」

「蘭がいいならいいけど…」

そう言っていると蘭はすぐに笑顔になった。

次々と色々な店へ入って行く。5軒目にしてやっと蘭は気に入ったものを見つけたらしい。今まで放っておいた新一を手招きして呼ぶ。

「ねえ新一！これどう思う？」

それは鮮やかな青色をしたスカートと白いワンピース、ピンク色のカーディガンだ。

どれも蘭に似合いそうなものだった。

「ああ、いいと思うぜ。」

「本気で言ってる？」

「本気だつて。」

「じゃあ全部買っちゃおうかな！」

そう言ってレジへと行った。

新一はさすがに疲れて、店の外のベンチに座っていた。

「おまたせ。…どしたの？疲れた？」

「疲れた？つて、お前なあ…」

そう言つと蘭はクスクスと笑いだした。

「そーだよね。ちょっと休憩しよつか？」

休憩がてら昼食をとり、1時間ほどで店を出た。

「新一は行きたいとこないの？」

「俺？んー…ねえわけじゃねえけど…」

「じゃあ午後は新一が行きたいところ行こうよ！どこ？」

「…海。」

新一の一言に蘭は驚いた。

「海！？まかさ泳ぐつもり？」

「バー口！！んなわけねえだろ！！」

新一は、一度間を空けてから続けた。

「見てえんだよ、海。なんとなく…」

そう言った新一の顔が、蘭には少し寂しそうに見えた。

「じゃあ行こ！！今からだったら遅くないよ！！」

「はあ！？まじ？」

「まじ！！！」

蘭は新一の手をひいて走りだした。

ここから一番近い海まで3時間はかかる。門限までに帰ることが出来る自信はない。

しかし新一は、この繋がれた手を離すことはできなかった。

「久しぶりだなあ、伊豆に来るの…」

「だな。」

新一は駅から出るなりキョロキョロと辺りを見回した。

「なあ、せっかくだから夕陽といっしょに見ねえ？」

「別にいいけど…なんで？」

「あれ。」

蘭は一軒のアクセサリーショップを指差した。

「お前に…まだ指輪買ってなかったから…」

両者が顔を赤らめた。

「じ、じゃあ行こっか？」

「おう。」

「蘭、どれがいい？」

「へっ？」

「だから、指輪…」

少し照れくさそうにいった。

そんな新一を見て、蘭はふわっとした笑顔で言った。

「新一が選んできたものならなんだってうれしいよ。ううん、新一に選んで欲しい…な。」

新一の顔がさらに赤くなる。

気付かれないように、ふいっと横を向いた。すると一つの指輪が目につく。

余計な飾りがなく割りとシンプルなデザインだ。

「これなんかどうだ？」

「うん！すごくいいと思う…」

「じゃ、決まりな！」

そう言って店員に渡した。

指輪を受け取って、新一はそれを大事そうに自分の服の胸ポケットに入れた。

店を出ると、なにやら蘭が慌てた様子で言った。

「大変！新一！夕焼け始まっちゃうよ！！」

ぎゅっと新一の手をつかんだ。

「ちょ、蘭！！」

「ほら！急ご！！！！」

そう言って二人はまた走りだした。

第17話 傍

新一と蘭が海に着いたときには、もう夕焼けが始まっていた。

「わあ…綺麗…」

蘭はゆつくりと砂浜へと降りていった。

確かに海は綺麗だった。

水面に夕陽が映し出されて真っ赤に染まり、きらきらと輝いていく。

同様に、蘭のワンピースも赤に染まり、髪が風に靡なびいた。

その髪を邪魔にしようとせず、ただ空中に彷徨彷徨わせている。

その光景が、どうしようもなく美しかった。

「ほら！新一っ！早くー！」

「おう。」

返事をする、新一もまたゆつくりと砂浜へ降りた。

そして、無防備に空いた蘭の手をそつと握る。

「しんいち……？」

「……お前と……ここに来て、ほんとに良かった。」

新一は遠くを見つめながら言った。

「……ねえ、どうして海が見たかったの？」

蘭はずっと考えていたことを口に出す。
新一は静かに言った。

「海をみたら……なんとなく全部忘れられる気がしたんだ。嫌なこと、全部……」

「そっ……か」

そう言うとき蘭は繋がれていた手をほどき、すっかり砂だらけになったパンプスを脱いだ。そして静かに海へ入っていく。

「…これからはあたしが《海》になる。嫌なこと、全部流してあげる！」

——逆光で、見えない。

蘭は今どんな表情をしているのだろう。

そう思ったときだった。風に吹かれ、何滴かの雫が空中に浮かび海に消えた。新一はそれを見逃さなかった。

気付いたときには走り出していた。

靴を履いたまま海に入り、蘭を抱きしめた。

「…つく…あ、あたしね…っ」

「うん」

「強くなろうって決めたの。今日だけでも泣くのやめようって決めてた。でも…っ」

新一はさらに強く抱いた。

「強くなんか無くたって、いい」

蘭は再びぼろぼろと涙をこぼし、新一の肩を濡らした。

「新一は、強いよ。」

「……バ―口……」

「え……？」

「俺が強くいられるのは蘭、お前がいるからだよ……」

新一は抱きしめていた手を解き肩に手をおいた。

「好きだよ、蘭。ずっと傍にいて欲しい。」

「あたしも…新一のこと好きだよ……」

「蘭、左手出して。」

蘭はゆっくりと左手を出す。

新一は胸ポケットから小さな包みを取り出す。

「俺の彼女っていう印な。」

薬指にはめる。

蘭は嬉しそうにコクンと頷いた。

「愛してる…これからも、ずっと…」

互いの唇が重なった。

二人を染めた赤が落ちるまで。

第18話

約束

夕陽が沈み、月明かりで海が藍色に染まった。
空には無数の星が輝いている。

「きれいだね…しんいち…」

「そうだな…」

不意に蘭の表情が曇る。

「でも…ちょっと怖い…」

「どうして？」

「…何かを落としたら、一生取り戻せないような気がする。大切なものも…全部…」

怖かった。また何かを失うのが。せつかく掴んだものも、落としてしまいそうで。

目頭が熱くなった。

しかしそれは遮られる。

新一が蘭に向かって笑いかけた。

「無くさねえよ。」

「え…？」

「どんなに暗くたって、そこに在るものは変わらない。見えないなら手で探ればいい。それに…」

そこまで言うと新一は勢いよく立ち上がった。

「どんな夜にも、朝は来るんだぜ？」

へへっと新一が笑った。

やっぱり新一は、強い。そう思った。

風で揺れる髪をうざったそうにかきあげた新一を見つめていた。

見つめていただけだ。それなのに新一が苦く笑っている。

—そう

蘭は泣いていた。

さっきとは違う涙で。

新一はそれを知っていた。

だから笑って蘭の涙を拭ってやる。

蘭もまた笑顔を返す。涙でくしゃくしゃになった顔で。

「ずっと傍にいらな…覚悟しろよ!!」

つん、と蘭の額をつつくとそのまま歩き出した。

「もう…!」

両手で額を押さえながら、新一を追いかけた。

満天の星空の下、二人の長く短い一日が終わった。

「まったく！今何時だと思ってるんだい!？」

病院に着いたとき、すでに時計の針は11時をさしていた。

やばい、と思ったがどうしようもないので大人しく怒られることにした。

「一回目だからまだ許すけど、次やったら…」

「わっわかりました！！これからはちゃんと約束守りますっ！！」

「…よろしい。あ、君…もう遅いから帰りなさい。」

医者は蘭の方を見て言った。

「あ、はい。じゃあね、新一！また明日！！」

「おう！またな！」

そう言つて二人は手を振りあつた。

蘭の姿が見えなくなると、医者が新一の肩を掴んだ。

「で？お別れのキスとかないのかな？」

突然思つてもみなかったことを言われ、新一は驚いて大声をだした。

「なっ何言つて…っ」

「しーーーーっ。声が大きいよ！」

医者は一度廊下を見渡してから静かに病室のドアを閉めた。

「何つて…まさか誤魔化せるとでも思つてゐるのかい？」

「何を……」

「左手薬指。」

新一ははっとする。
そしてもうばれたか、と苦笑した。

医者は少し笑った。
しかしすぐに眉間に皺を寄せた。
新一の顔色が悪いことに気付いた。
額に手をあてると、思ったよりも高い温度に少し驚いた顔をした。

「疲れたんだろう。もう休んだほうがいい。」

そう言って強引にベッドに寝かしつけられた。

いきなりすぎてわけがわからなかったが、本当に疲れを感じていた
新一は考える暇もなく眠りに着いた。

医者は病室を出て、少し歩いたところで力無く壁に寄りかかった。

「私は…どうしたら…っ」

そう呟くと、大きな手で顔を覆った。

第19話

大切

「おはよ！蘭！」

「うん！おはよ。」

蘭の親友、鈴木園子はいつも通りの時間に蘭を迎えにきた。

「なあに？なんかいいことでもあった？」

「わ、わかる？」

素直にそう答えた蘭に園子は驚いた。

「な、なにがあったってのよ？」

「えへへっ秘密ー！！」

なぜか機嫌が良すぎる蘭を不思議に思っ、園子は首を傾げた。
しかしすぐに理由がわかった。

「新一くんとなんかあったでしょー？」

「ええ！？」

蘭の顔が真っ赤になる。

その途端、園子がいきなり大声をだした。

「ああー！！！！ちょっと！！！！なによそれ！！！！」

園子は蘭の左手についている指輪を指差す。

蘭が照れくさそうに笑うのを見て瞬時に理解する。

「ふーん…いつ貰ったのよ？」

「きつ 昨日…」

「へえ…やるわね、あやつ…」

「もつつ園子ったら…」

園子の顔はあきらかににやついている。
しかしそれはすぐに優しい笑顔へと変わった。

「よかったね…蘭。あんたずっと待ってたもんね。新一くんのこと…」

一瞬、蘭は驚いた顔をした。
園子からそんなことを言われるとは思わなかったから。
しかしすぐに蘭も微笑む。

「うん。」

それから二人はたわいもない話をしながら学校へと向かった。

「らん！帰るよー！」

教室中に園子の声が響いた。

「え？だってまだお昼よ？」

「何言ってるのよ？今日は午前授業だって言ってたじゃない！」

「ええっ！？」

「よかったわねー！新一くん早く会えて！」

「もうー！」

そうは言ったが実際は新一に早く会えるのは嬉しかった。
蘭の顔に自然と笑みがこぼれる。

「んもつつラブラブなんだからあー!」

いつもなら、そんなんじゃないわよと返すだろう。
だが今回は違った。

「そう…かもね…」

目を丸くしている園子を見向きもせず、蘭は微笑んだ。
そして左手の指輪にそって触れた。

第20話

交錯

蘭は学校から出て園子と別れると、一人新一の家へ向かっていた。昨日の帰りの新幹線で、何でもいいから本を持って来て欲しいと頼まれていた。それを取りにいこうとしている。

（まったく…あんなたくさんの中から何でもって言われてもねえ…）

そう考えていた時だった。

「あら？蘭ちゃんじゃない？」

突然後ろから声をかけられた。

振り向くと、思いもしない人物が立っていた。

「新一の…お母さん…どうしてここに？」

「新一と連絡がつかなくてねー…心配で来ちゃった！蘭ちゃん、なんか知らない？」

驚いた。

有希子まだ入院のことを聞かされていないのだ。

「き…いてないんですね…」

「え？何を？」

口に出すのが嫌だった。大丈夫だと信じているけれど。

「実は——。」

すべてを話すと有希子はひどく驚いた顔をした。

「そんな…新ちゃんが…？」

「あつあたし、これから新一の病院行くんですっ！一緒に行きませんか？」

「え、ええ…」

ちょっと待っててください、と声をかけた。新一の家に入り、適当な本を5、6冊取ると小走りに有希子のもとへ戻った。

重い空気が漂う中、二人は病院へと向かった。

新一の病室の近くまで来ると、なにやら看護師たちが慌ただしく動いていた。

「なにかあったんでしょうか…」

不安が、とてつもなく大きな不安が、蘭の胸によぎる。

「ねえ蘭ちゃん…新一の病室ってあそこよね…？」

そう言って、有希子が指差した部屋では看護師が出たり入ったりしていた。

蘭は走って新一の病室に行った。

そこで蘭は言葉を失った。

新一がいた。頭を重く枕に沈め、荒い息をし、苦しそうに固く目を閉じた姿で。

そんな新一を囲んでいる医者や看護師がなにやら焦った顔で難しい話をしている。

——何で

何があつたの…？

「どうしたの、蘭ちゃん…？」

そう言って入ってきた有希子もまた言葉を失ってしまった。

第21話

安堵

二人が入り口の前で立っていると、医者が気付いた。

「毛利さん…だったかな。あとで話さなければいけないことがある。…そちらの方は？」

「工藤有希子。工藤新一の母です。」

有希子が絞りだすように言った。

「では、工藤さんも一緒に…応接室で待っていてもらえますか。」

「分かり…ました。」

看護師が医者を呼んでいる。かなり慌てた様子で。

邪魔になるからと、早々とその場を後にした。

こんなの言い訳だ。
ただこの場にいたくなかった。

これ以上、この状況を理解しないために。

*
*
*

30分経って、ようやく医者が来た。

「お待たせしました。」

いえ、と返事をする。と医者は二人が座っていた向かいの椅子に座る。

「工藤君のことは、とりあえずは心配いりません。」

その言葉に二人は顔を上げた。

「工藤君は、一時間ほど前から40度を超す高熱を発症しました。しかし先程投与した解熱剤で今は落ち着いているので安心してください。」

「あの…それってこの病院に運ばれたときと同じじゃ…」

「ええ。APTX4869の副作用からくるものです。今回の一件で断定しました。」

どくん、と心臓が高鳴った。

「新一は…助かりますよね…？」

蘭は一番聞きたかったことを口にする。
すると医者は表情を少しも変えずに言った。

「…灰原哀さん。御存じですよ？この方の協力のもとで、副作用の原因となった物質を解明させ、中和させる物質を開発しようとして試みています。」

「完成の目処は…」

「それは…」

医者はそのとき初めて言葉を濁し、表情を暗くした。

「信じてます。ずっと。」

蘭は強い目を医者に向けた。

医者は一瞬驚いたような顔をしたように見えた。
そして、とても穏やかな目を蘭に向けた。

「死なせないよ…絶対に。それに…」

言いかけて、医者は蘭を見た。蘭はきょとんとしている。

「彼は死にたくても死ねないさ。守らなければいけない人が出来たみたいだからね。」

その言葉に蘭の顔が真っ赤になった。
医者は、少し微笑んで出ていった。

第22話

在処

有希子は優作、工藤新一の父親を呼んでくると言って宿泊先の宿へ戻った。

蘭は一人病室へと向かう。

病室について小さくノックをした。

「新一…寝てる？」

返事が返ってこないことを確認し、ゆっくりと新一に近づいていく。そして新一をそっと撫でた。その時だった。

「ん……っ……」

「新一？」

「っ……」

（うな…されてる……？）

蘭は強く揺すって覚醒を試みる。

「ちょっ…新一!？」

「ん…っ」

「新一!！」

少し強めに名前を呼ぶと、新一はゆっくりと目を開けた。

「ら……ん……」

蘭はほっと息をついた。

新一は固く握りしめていたシーツを緩め起き上がった。
そしてそっと蘭の腕を掴んだ。

「大丈夫?しんい……」

言いきる前に、新一は掴んでいた蘭の腕を引き寄せる。
そして抱きしめた。

「え…？」

新一は蘭の服をぎゅうつと握った。

「今日は…お前に会えないかと思った…」

予想しなかった言葉に蘭は驚く。
そつと、再び新一の頭を撫でた。

「うん…」

「夢を見た。お前に会えなくなる夢。すごく…怖かった。」

そう言った新一は少し震えていた。
蘭は優しく穏やかな声で言う。

「会えなく、なんてならないよ。だってあたしが新一に会いたいか
ら、だから会いに来るから。どんなところにいても…」

するり、と新一の手が落ちた。気がつくと思っていた蘭の服からも、
手が離れている。

「新一？」

呼びかけても答えない。
蘭の肩に、ぽすつと新一の頭が落ちた。

「寝ちゃったの？」

すうすうと小さく寝息をたてている。

蘭は新一の体をゆっくりと寝かし布団をかける。

そしてベッドの側にあった椅子に腰掛け、頬杖をついた。

しばらく経って有希子が優作を連れて戻ってきた。

「蘭ちゃん！新一の具合どお？」

「あ、はい。大丈夫だと思います。熱も大分下がったみたいですし……」

「そう、よかった！」

不意に、有希子が悲しげな目をする。

「ほんと…なんでもないような顔で寝てる…」

優作が有希子の肩に手を置いた。

「有希子、心配するな。新一は大丈夫だから…」

「何が『大丈夫』よ！！根拠もないこと、簡単に言わないでよ！！！」

優作の言葉を遮り、有希子が大声を出す。

蘭もさすがにそれには驚き椅子から立ち上がる。

丁度その時、ドアをノックする乾いた音が聞こえた。

「工藤君？入るわよ？」

その声に蘭は少し眉を寄せた。

第23話

所為（前書き）

えっと

有希子ちゃん崩壊してます（^| ^ ;）

ファンの方ごめんなさいm（——）m

第23話

所為

「工藤君？入るわよ？」

哀は静かにドアを開けた。

しかし、予想以上に人がいたのに驚いたのか、少し挙動不審な態度を見せた。

「哀ちゃん……」

「蘭さん……と……えつと……」

「工藤新一の母です。こっちは父親。」

有希子が言った。顔色一つ変えずに。

「あ……ご無沙汰して……」

「哀さん……といったかしら。少し聞きたいことがあるの。ちょっと

出ない？」

哀の言葉を見殺すように言った。

「おい、有希子……」

優作が声をかけるが、有希子の耳には届いていない。

「え、ええ……」

戸惑いながらも、哀は有希子について行く。

「蘭君、新一を頼む。」

いつもと違う有希子の態度。

しばらくしてから優作もまた後を追った。

「なにかしら、話って。」

哀は素っ気ない態度で聞いた。
が、その表情も一瞬で凍りつく。

「…APT X 4 8 6 9」

「…な…」

「やっぱりあなたなのよね…？作ったのは…」

哀は少し躊躇ったあと静かに言った。

「ええ…」

その刹那、俯いていた有希子が顔を上げ、キッと哀を睨んだ。

——パァン

乾いた音がした。
哀の頬が赤く染まる。

有希子は哀を平手で殴った。

「あなたが…っあなたがずっと新ちゃんを苦しめてきた…」

「……………っ」

哀は殴られた頬をおさえもせずに俯いた。

「あなたさえいなければ…っ。新ちゃんはこんな危険な目に遭うこともなかった…っ」

「……………」

「あなたさえいなければっ！…！新ちゃんがこんなにつらい思いをすることもなかったのに…っ」

「有希子！…！」

追ってきた優作が来た。

哀の頬が赤くなっているのを見て、自らの腕で有希子を制した。

「落ち着け。有希子…」

「落ち着けてなによ！？わたしがいけないの…！？」

有希子はぼろぼろに泣いている。

優作はそれを見て、優しく、震えた声で言う。

「誰も…誰も悪くないんだよ…。君も、その子も…」

そつと有希子を抱きしめようとする。

しかしその腕は払われる。

「じゃあどうして新ちゃんが苦しまなきゃいけないの？…誰のせい

でもないなんてこと、あるわけないじゃない!」

そう叫ぶと、声がした。

自分がよく知る、声。

第24話

意地

新一が目を覚ましたのは、優作が出ていった直後だった。

「…ん……」

「あ、新一！起きた？」

「蘭…なんかあったのか？」

「え！？どして？」

「あ、いや…大声が聞こえたような気がして…それにドア開いてたから、なんとなく…」

隠す必要はないだろう。
蘭は全てを話した。

「母さんが、灰原を…？」

「うん、話があるからって…」

急に新一の顔がハツとしたもの変わった。

「まさか…っ。蘭！！母さん達どこに行った！？」

「え、えっと…階段を登っていったから…屋上かな？」

それを聞いた新一は勢いよく起き上がりベッドから降りた。走ろうとするも、足が纏れて倒れてしまう。

「だめだよ！！無理しちゃ！！」

新一は、はあはあと荒い息をしながら胸の辺りをおさえている。よほど呼吸が苦しいのか、吐く息に咳が混じる。

「…嫌な…予感がする。早く追わない…と…」

途切れ途切れの言葉でも、理解は出来た。

きっと、何かが起こっている。

蘭は新一の体を支え、二人で屋上へ向かった。

「母さん!!!」

必死に叫んだ。

「新ちゃ…」

自分がよく知る声。

新一だった。

「灰原が悪くねえ…だから」

「どうして？あの薬を作ったのはこの子なのよ！？なのはどうして？」

有希子は見たこともないくらい泣いていた。
動揺していないと言えば嘘になる。

しかし低く静かな声で言った。

「…たしかにそいつは薬を作った。でもそれを飲む原因を作ったのは俺だ。すべては俺の甘さが招いた結果なんだよ…！」

「でも…っ」

「…薬がなかったら、って正直思ったこともあった。でも誰かのせいにすればするほど、自分で解決できなかったってことになるだろ？」

皆が新一を見た。

そして新一は言う。

「これは俺の…探偵としての、意地だ。」

強く、決意を感じさせる目だった。

第25話

憎悪

「これは俺の…探偵としての、意地だ。」

そう言って新一は崩れ落ちるようになり倒れた。

「新一！！！」

蘭が叫ぶ。すぐにしゃがみ、新一の様子を伺おうとした。しかし、優作によって止められる。

「蘭君、大丈夫だ。新一は私が運ぶ。」

「え…？あ、はい。」

優作は新一の体を支え歩き出そうとする。その足が止まる。

「有希子を…頼む。今の私ではどうすることもできない…」

男は男同士、女は女同士、といったところだろうか。

蘭は振り返り有希子のもとへ行こうとした。
その時すでに、哀の姿はなかった。

「おばさま…」

「ごめんね蘭ちゃん…変なところを見せて…」

「いえ…」

「本当はわかってた。あの子は悪くないって…」

有希子は涙を拭いながら言った。拭いきれない涙が地に落ちる。

「でも…どうしても許せない…っ。だって…元凶だもの…」

そう言うと、蘭は優しく微笑んで言った。

「間違いでは、ないと思います。人間は一度憎んだものを簡単に受け入れられるほど…強くはないんです。」

「……っ」

「だから、時間をかけて…たくさんかけて、憎しみを解くことができれば…強く、なれるんじゃないでしょうか。」

有希子は少し俯いて、顔をあげた。
その顔に少しだけ笑顔が戻っていた。

「蘭ちゃんは、強いね…」

その言葉に蘭は目を丸くした。
そしてクスクス笑って言った。

「新一の、所為ですよ……」

なりたかった自分に、近づいていく。
うれしかった。

蘭の言葉に有希子もまた目を丸くする。

そして、二人は笑いあった。

「大丈夫か？新一……」

優作が心配そうに新一の顔を覗き込む。

しかしそう言った瞬間、新一は顔を上げニカッと笑った。

「なんだよ、父さん。さっきの、演技だって気づいてなかったのかよ？」

「は？」

優作はきょとんとした顔で新一を見ている。
それを見て新一は吹き出す。

「ははっ、マジかよ？世界屈指の推理小説家も、息子の演技は見破れなかったか！？」

「……シャレにならんぞ」

「わりいわりい！だって、あんなった母さんは俺達がいたってどうもなんねえだろ？だって蘭と二人きりにした方がいいと思ったんだよ！」

「だからって、あんなやり方しなくても……」

新一がにやけた。

「試したな……！！」

*

有希子がだんだんと笑顔を取り戻してきたところで、蘭はハッとす
る。

「そうだ！新一！！大丈夫かな…」

その言葉に有希子はクスッと笑った。

「大丈夫よ！あれは演技だから！！」

「へ？」「新ちゃんがあんなに大袈裟に倒れると思う？まーったく
！こんなの気づかなきゃ新一の奥さんは務まらないわよ！！」

蘭の顔が真っ赤になる。

「えっ！？」

「あら、誤魔化しても無駄よ？その指輪…新ちゃんからでしょ？」

蘭はコクンと頷く。

有希子は大きくため息をついた。そして聞こえるか聞こえないかわらないのと言った。

「とうとう蘭ちゃんに捕られちゃったかあ…」

「え？」

「んーん！なんでもない！新ちゃん達のとこ、戻ろっか！！」

そう言っつてベンチから立ち上がりスタスタと歩いて言った。
蘭はそのあとを慌てて追った。

蘭達が病室に戻り少したった頃、優作と有希子は宿に戻ると言って出ていった。

最初は不思議がっていた蘭だったが、有希子が出ていく際にしたウインクですべてわかったらしい。

それ以上引き留めることもなく、顔を真っ赤にしてストンと椅子に座った。

新一はふうと息をついてから言った。

「わりいな、蘭…いろいろ」

「いいよ。大丈夫！！それよりちょっと体休めたほうがいいよ。そうだ、頼まれてた本！はい！！」

蘭は強引に本を渡した。

少し苦く笑って新一は答えた。

「お、おお…ありがとな。」

断るわけにもいかず、新一は5、6冊の中から1冊をとり読み進めた。

第26話 全部

新一が小説を読み始めて1時間が経った。
突然、何かを思い出したかのように「あ。」と声をあげた。

「なあ、蘭。お前さ、俺になんか言うことねえか？」

「へ？言うことって？」

新一のいきなりの発言に蘭は多少驚く。

新一は読みかけてた本を閉じ、続けて言った。

「俺がここに来る前、お前なんか言いかけただろ？よく覚えてねえけど、意識飛ぶ前にお前の声聞いた気がする。」

蘭は最初、何のことを聞いているのかわからなかった。

『あつあのね、新一…』

新一が倒れる直前に放った言葉。

思い出した。途端、顔が熱くなるのを感じた。

「あついや…なんでもないの！なんでも…」

「なんでもねえことねえだろ」

「もういいの！今更だし…」

「言えよ。気になるだろ？」

蘭は一度「うー…」と唸ってから上目遣いにちらつと新一を見た。

「わ…笑わないでね？」

「おう。」

一度深呼吸をする。

「…新一はあたしのどこを好きになったの…？」

「は？」

「だっだって！信じられなかったんだもん！！いきなり好きとか言われて…」

新一は一瞬目を丸くしたが、すぐにクスクスと笑いだした。

「なっ何よ！！笑わないでって言ったじゃない！！！」

「わりいな！そんなことだとは思わなかったんだよ！！！」

新一はしばらく笑っていた。止んだ頃、再び蘭が答う。

「で？どうなのよ？」

「え？お前さっき、もういいって言ってなかった？」

「そうだけどー…」

蘭は頬を膨らませてフイツと目を反らした。
すると、新一が呟くような小さな声で言う。

「…全部。」

「え？」

「全部、好きだよ。」

蘭は反らしていた目をゆつくりと新一に向ける。

反対に今度は新一が目を反らす。そんな新一に蘭は優しく微笑んだ。

「あたしは新一の嫌いなところ、いっぱいあるけどなあ…？」

「…まじ？」

新一は、焦ったような顔をして蘭を見た。

本気で不安げな顔をしている新一に、蘭はクスッと笑った。

「うそうそ！大好きだよ…新一…」

そう言って蘭は椅子からカタンと立ち上がり、新一の頬にキスをした。

——コンコン

ドアのノックの音がした。

二人は慌てて離れ、あたふたとさっきまで読んでいた本を手にとった。

「工藤君、熱計ってくださいーい…って大丈夫！？顔真っ赤だけど…」

「だ、大丈夫です！！」

「しっ新一！！あたし帰るね！！」

蘭はそう言つと、ものすごいスピードで病室をあとにした。
その光景を見て、看護師がニヤつとした。

「あら、あたしお邪魔だったかしらあ？」

「そっそついうのいいですから！！」

その後しばらくその看護師は新一をからかっていたらしい。

最初は困ったような表情をしていた新一であつたが、最後には嬉しそうに笑いながら蘭の話をしていたりしていた。

まるで、幼い子どものように無邪気に笑いながら。

この笑顔が消えてしまつ日が、近づいていることを知らずに。

第27話

物語

三ヶ月が経った。

新一は相変わらず、とは言い難い生活を送っていた。

三ヶ月前よりも高熱は頻繁におこるようになったし、身体中が激痛に襲われ一日中起き上がれなかったこともあった。酷い時には、発作的に起きる咳で呼吸困難になりかけた。

医者が言うには、これらの原因はAPT-X4869とその解毒剤による細胞破壊が進んだためらしい。

これを聞かされた頃だろうか。新一が無理に笑うようになったのは。

ガラガラ、とドアが開いた。
いつものように蘭が病室に入ってくる。

「おはよ。新一！具合どう？」

「大丈夫。毎日聞くなよ。飽きるだろ？」

蘭は、はあ…とため息をついた。

「具合、良くないくせに。いつも適当におんなじこと言ってるから飽きるのよ！」

新一は少し苦笑した。

「今日は本当。いつもより大分楽。」

その言葉を聞くと蘭はニコッと笑った。

「そっか。良かった！そうだ、今度の日曜日さ、一時帰宅の許可おりたよ！」

「日曜日？早くないか？こないだ帰ったばかりなのに。」

「だめ…かな？」

蘭は上目遣いに新一を見た。

「や、駄目じゃねえけど…」

「あの…実はね、あたしが先生にお願いしたんだ。」

「え、なんで!？」

新一は不思議そうに蘭を見た。
「なんで、と言われて蘭は少し顔を赤くしながら恥ずかしそうに言った。」

「に、日曜日ね、花火大会があるの…だから…新一と行きたいなあ
って…」

「え…」

「ほ、ほらっ！いい気分転換になるし！和葉ちゃん達も呼んでさ！」

途中から早口になってしまった蘭を見て、新一は微笑した。

「さんきゅな、蘭。」

「やったあ！あれ、でもおかしいよ新一。お礼を言わなきゃいけないのはあたしの方なのに……」

蘭は少し笑って言った。

そんな蘭を見て、新一は悲しそうとも嬉しそうともとれる顔で言う。

「おかしくなんかねえよ。いいんだよこれで……」

その表情と言葉の意味は何を示しているのか、蘭はまだ知らなかった。

第28話 再会

「久しぶりー蘭ちゃん！」

「和葉ちゃん!!」

土曜日、蘭は空港で大阪組と待ち合わせをしていた。

「おお！姉ちゃん。久しぶりやなあ！」

「そうだね！二人ともわざわざありがとね！」

「ええねんええねん！あたしらも花火楽しみやし…。な？平次!!」

「そやな！東京の花火は初めて見るし。」

そうにぎやかに話をしていた。
しかし話題が変わるに連れ、それは重い空気へと変わり、表情も暗くなる。

「工藤…どうなんや？」

蘭は少し眉を寄せた。

「昨日と一昨日はあまり体調良くなかったみたい。」

「さやか…。明日大丈夫なんか？」

「今日の体調次第だって…。良ければ今日の夜から帰っていいって言われてるんだけど…」

そう言ったとき、重い空気に耐えられなくなった和葉が口を開いた。

「でも工藤くん、明日楽しみにしてるんやろ？」

「えっ？うん…。多分。」

「だったら大丈夫や！！もう、蘭ちゃんがそんな顔しとったらあかんで！！」

「そ…かな？」

「そや！！だからもつと笑い？」

そう言って和葉は蘭にニコッと笑いかけた。
それにつられたかのように、蘭もまた笑みを浮かべた。

平次は病室のドアを軽くノックした。
しかし返事がない。

「くどお？」

控えめに声をかける。
近づいて顔を覗きこむと、静かに寝息をたてていた。

「なんや、寝てるんか。」

平次は少しつまらなそうに言った。

「しょうがないやん！工藤くん病人なんやで？」

「わかつとるわ！つつか大きい声出すなや！！起きるやろ！！」

「今の平次の声の方が大きいわ！！」

二人が出した大声で、新一の体が身動いた。

「二人とも声小さくっ！！」

遅かった。

「……ん……」

新一がゆっくりと目を開けた。
しまった、という顔をしている蘭と和葉とは逆に、平次は一人嬉しそうに新一のもとに寄った。

「おおー工藤！目え覚めたか？」

「はっ……とり……？」

「そやで！具合どうなんや？」

「まあまあ…てか声でかい…」

新一は自分の手の甲を額にあて、きつく目を閉じた。

「なんや自分、めっちゃ機嫌悪ないか？」

「うつせー…誰のせいだと…」

「スマンて！まあでも元気そうで安心したわ。」

新一は閉じた目を開けて平次を見た。

「…わりいな、心配かけて。」

「元気になることだけ考えてればええねん。余計なこと考えんなや。」

「さんきゅ…」

そう言つて新一は再び目を閉じようとした。
しかし平次の耳打ちでそれが遮られる。

「せつかく姉ちゃんの浴衣姿見れるんやから、明日は行かな損やで
っ……」

「おっ……お前なあ……!!」

「ちよつと平次!!なにコソコソ話してんねや!!」

「お前には関係ないわ!」

「なんやと!!」

こうしてまた二人の痴話喧嘩が勃発した。

新一と蘭はそれを苦笑しながら見ていた。
しかし蘭が口を開く。

「……ねえ、新一」

「ん？」

「きっと明日は楽しい日になるよね…？」

「だな…」

いきなりそんなことを言い出した蘭に少し驚きながらも、新一は答える。

「よかった…」

蘭のその微妙な表情に、新一はさらに首を傾げた。

第29話 背中

「新一っ!!早く早く!!花火始まっちゃうよ!!」

「わあってるって…」

蘭は玄関から大声で叫ぶ。

新一は座っていたソファからゆっくりと立ち上がる。

「大丈夫?具合…」

「大丈夫だって。心配すんな。」

「だって…」

蘭は頬を膨らませた。

そんな蘭の頭に新一はぼんと手を置く。

「怒るなよ。」

「じゃあ…ゆ、言つてよ！許すから…」

「言つて…何を…？」

蘭は少し顔を赤らめて、新一からフイツと目を背ける。

「だからー…浴衣………」

「綺麗……」

「えっ！！」

——ドォーン

花火が上がった。

「へ……？」

蘭はバツと新一を見た。

新一は空を見上げている。

「すげー……見るよ蘭……！」

「もー……！！！」

そうじゃなくて、そう蘭が言いかけた時だった。
新一が真剣に蘭を見た。

「……冗談。きれいだよ、蘭……」

「あ………」

新一が、少し笑う。

「早く行こうぜ。服部達待ってんだろ？」

「う…うんっ」

花火の音と、心臓の音がごちゃごちゃで、わからない。

蘭は顔の赤らみを残して、新一のあとを追った。

「工藤！お前なにしとんねん！！もう花火始まってんで！！」

「わりいな。家出んの遅くなつてさ。」

新一は適当に言って、へへっと笑った。

平次の陰からひょっこり顔を出した和葉が蘭のもとへ駆け寄る。

「わあ、蘭ちゃん!!きれいやなあ…」

「ありがと!和葉ちゃんも似合ってるよ!その浴衣!!」

蘭はにこにこ笑って答える。

「なんや蘭ちゃん…えっらい嬉しそうやなあ…工藤くんとなんかあったやろ?」

「ふえっ!?!な、なんにもないよ!!」

「怪しいなあ…」

「おい和葉あ!!なにしてんねん!!はよ行くで!!」

「あつ待つてえ！！行くで蘭ちゃん！」

平次に叫ばれて、蘭と和葉は慌てて走りだした。

「工藤、人混みアカンやろ？どっか静かな場所探すか？」

「え、いいよ。俺待つてるから、お前ら行って来いよ。あっちには出店とかいっぱいあるし……」

「はあ？それじゃあ来た意味ないやんけ。」

「だから、俺は一人で見てるから。」

新一は苦笑いした。

その時、蘭が慌てたように声を出した。

「あつあたしも待つてる！」

「なんや、姉ちゃんまで……」

「ええやん平次！！ウチら二人で行こ！！」

和葉のいきなりの発言に平次は驚いて振り向く。

「なに言つてんねん……和葉」

「もう！わからんやつचनाあ……」

そう言つと和葉は平次に耳打ちをした。

「蘭ちゃん、きつと工藤さんと二人きりになりたいんやわ。邪魔しちゃあかんよ!！」

「…呼んだのあっちゃんけ。」

「細かいこと、気にせんでええねん!!蘭ちゃん!!ウチら行っている買ってくるわ!待っててな。」

「あ、うん!お願い!！」

蘭にそう言い残し、平次と和葉は早々とその場をあとにした。

第30話 強堅

「ねえ新一、どこ行くの？」

新一は延々と歩いている。
蘭はそのあとをついて歩く。

「…土手。」

「土手？どうして？」

「あそこは人も少ないし、花火がよく見える。」

「へえ…」

そう話している間に目的の場所に着く。

「1」の辺でいいか？」

「うん！ほんとだ…よく見えるね。」

「だろ？」

しばらく沈黙が続く。

新一がその場にストンと座った。

すると蘭が言いづらそうに口を開いた。

「ねえ」

「ん？」

少し躊躇った。

「今日くらい…無理しなくて、いいよ。」

「え…？さっき言っただろ？大丈夫だって…」

「違うの！！そうじゃなくて…」

蘭は一度言葉を切った。

新一は不思議そうに蘭を見ている。

「もう、無理に笑なくていいよ…」

「え………」

新一はギクリとする。

「新一がほんとにはつらい思いしてること、あたし知ってる。でも隠して…なんでもないように笑って…」

言葉が、溢れるように出てくるのに、うまく伝えられない。

「そういうの見てると、あたしだってつらいし…怖いよ…」

「怖い？」

新一が問う。

「怖い…ほんとには苦しみなんかまったく存在しなくて、これからもずっとこうして笑っていられるって思っちゃうから…」

新一は無言で蘭を見ている。
するとスツと立ち上がり蘭のもとへ寄った。

「つらいかどうかは俺が決める。そんな心配すんな。」

「ほら、そうやっていつも強がる。」

「あんなあ…」

「分けてよ…」

蘭の一言で新一の言葉が切れる。

「分けてよ。新一が抱えてるもの全部…。」

時々上がる花火が、蘭の濡れた頬を見せる。
しかし、ふっ…と笑顔になる。

「あたしは…《海》だよ…」

不意に新一の瞳が揺れた。

第31話

陰影

「あたしは…《海》だよ…」

不意に新一の瞳が揺れた。

少し笑った。

「蘭はさ、海じゃなくて《空》だよ…」

「え……?」

「海よりも、いろんなものを映す。すごく綺麗だけど、その綺麗さに時々目を逸らしたくなる。」

新一が空を見上げたのが、シルエットでわかった。

さっきから花火が上がらない。
真っ暗で見えない。

「どういうこと？新一の言ってること、よくわかんない……」

蘭もまた、シルエットで返す。

「いいよ……わかんなくても、いい……」

まだ、暗い。
見えない。

「それじゃ自己満足だよ。」

「…そうかもな」

「…何を、抱えてるの？」

新一は震えていた肩をさらにビクツと大きく震わせた。

新一を優しく触れるように抱きしめた。

「話して。全部…。」

「なんで」

「なんでって…」

蘭は少し困った顔をした。
再び花火が上がる。

「お願い…」

新一は小さくため息をついて
抱きしめられていた手を離れた。

「…俺さ、お前こと守るって言ったけど…」

「…うん」

「もしも…」

「くどおー！…なんやこんなとこに居たんか。」

平次の声が新一の言葉を遮った。
続けて和葉が言う。

「もう！蘭ちゃん！携帯くらい出してくれたってええやん！！」

「えっ！あ、ごめん…気づかなかったの。」

「まあ、ええよ。あっウチな、花火買ってきてん！帰ってやろ！！」

「うん…」

蘭が返事をする、和葉は蘭の手を繋ぎ走りだした。

「あつ！ちよお待てや！！」

そう言うと平次も走りだした。
その後ろを新一が歩く。

和葉達が平次達と大分差をつけた時、蘭がゆっくりと振り向いた。

さっき、聞けなかったこと、
どうしても聞かなければいけない気がしたから。

第32話

自身

「手持ち花火なんて久しぶりやわぁ…きれいやねえ！」

和葉が嬉々と声をあげる。

「うん！すごくきれい…」

そう言ってからちらつと新一を見た。

こんなに元気にいる新一を見るのは久しぶりだった。

少し疲れたような顔をしていたが、いつもの数倍は笑っている気がする。

もつとも、それが本当のものであればの話であるが。

（わかんないよ…新一…）

蘭の視線に気がついて、新一が笑つ。それすらも真か虚であるかわからない。

「蘭ちゃん？どないしてん？」

「えっあつ…なんでもないよ」

「花火」

「え？あつ消えてる…」

「何かあつた？」

和葉が心配そうに顔を覗きこむ。

「うつん、なんでもないよ！花火楽しもー!!」

そう言つて、出来る限りの平然を装つた。

花火を玄関まで取りに行った。
暗くてよく見えない。

「はい。」

花火を手渡された。
新一だ。声でわかる。

「あ、ありがとう…」

「なんだよ？」

「え、何が？」

「さっき、見てただろ？」

新一がふと蘭を見た。
蘭は言う。

「…楽しい？」

「はあ!？」

「さっき見せてくれた笑顔…ほんとのもの？」

新一は少し眉を寄せた。

「もう…わかんないよ」

「俺だって、わかんねえ」

「え…?」

悲しそうな、切なそうな、顔。

蘭は新一の言葉がわからなかった。

「わかんねえよ…本当に笑えてるかなんて、俺だってわかんねえ…」

いつだったか、新一が「蘭の本当の笑顔が見たい」と言った。

蘭は笑う。

新一は笑わない。笑えない。

どうして

わからない

「なんてな！ほら、花火の続き行こーぜ！」

冗談のトーンには到底聞こえなかった。
きつと、これが本音だ。

「ちょっと待ってよ。さっきの話の続きは？」

いろいろな疑問を隠して
別の話題を振る。
そうしなきゃいけない。

「…やっぱ、言わね」

そう言ってニカッと笑った。

—いつも通り。

遠くで鳴る、花火の音が

終わりを告げた。

第33話

後進

「さ、戻る。まだこんなにたくさん…」

そこまで言って、新一がずるずると座り込んでいったことに気がついた。

「し……いち…?」

はあはあと荒い呼吸が聞こえる。

「ちょ、どしたの!? 大丈夫!？」

「へい…き」

「嘘!」

苦し気に続けるその呼吸は治まる気配もない。

蘭は慌ててしゃがんで、新一の背を擦った。

「…ほんと…大丈夫だから…」

行って、小さい声で続けた。

「…ばか」

「え」

「もう、やめてよ…っ。何回言ったらわかるのよ!!」

自然と声が震えた。

「…いめん」

狭窄音に交じる声。

聞きたくない。

謝って欲しくなんか、ない。

ただ安心できる一言が欲しかった。

「工藤！どないしてん！！」

「あ…服部くん…」

平次が異変に気付き寄ってきた。

少し眉を寄せて脈をとり始める。

「何しとんねん姉ちゃん！はよ救急車呼び！！」

「あ…うん！！」

返事して、携帯をポケットから取り出した手が掴まれる。

「新一!？」

「いい…から…」

「どうして!？」

「いい…やめ………」

捕まれている手が熱い。
一刻も早く病院に連れていきたい。しかし必死に止める新一を無視することは出来なかった。

「…姉ちゃん、工藤の薬まだ残つとるか?」

「え……？あ、うん……」

「それ、とりあえず飲ませて寝かしとつたら落ち着くかもしれん。
工藤の部屋、案内頼む。」

「あ……こつち」

表情一つ変えずに、平次は家中に入った。

「工藤…大丈夫か？」

「…ああなんとか。蘭は？」

「外。和葉と一緒にいる。」

「…そっか」

そう言つて、新一は布団に顔を埋めた。

「具合悪なつたこと、なんで言わなかったん？」

「…別に」

「なにがや!!」

大声が部屋中に響く。

新一はゆっくりと体を起こした。

「ま、まだ寝とき！無茶すんなや!!」

「いい、もう大丈夫。」

新一は深く息を吐いてから、ベッドに寄り掛かった。

「なんで、って言ったな……。言わないとわかんないのかよ?」

「わからへん、やから聞いてるんやないか。」

新一は静かに言った。

「簡単だろ？病院に戻りたくねえんだよ。」

「はあ！？子どもかお前は！！」

「戻ったら、もう出れねえんだよ。」

「……え……？」

第34話

悲哀

戻ったら、もう出られない。

「どう言う意味や……」

新一はだるそうに一度息を吐いてから言った。

「…言われたんだ、医者に。進行が思ったより早い、外出はこれが最後ってな…」

「はは…冗談きついで？」

新一はキツと平次を睨んだ。

「冗談なんかじゃねえよ!!」

睨んだ目を離す。
シーツを強く握りしめた。

「もう…時間がねえんだ…っ。この体が、動く時間が…!!」

平次の頬に汗が伝う。
息を飲んだ。

「そんなの考えすぎや!」

「発作が起こる間隔が短くなってきてる。少しでも薬を手離せばこのザマだ…」

「う、嘘や…」

「嘘なんかじゃ…」

そこで止まる。

平次の顔を見てハッとした。
その刹那、

「――っ」

目眩。

これも、もう慣れた。

だんだん視界がぼやけていく。新一は額に手をあて、俯いた。

「横になりい！今日は…休め。」

無理矢理寝かされた。

疲れて、眠ってしまいそうだった。
だから、その前に言った。

「うめん…」

迷惑かけて

弱音を吐いて

わざと心配かけるような事言って

泣かせて、ごめん。

そのまま意識を失った。

失いたかった。

ただ、現実から逃れるために。

第35話

施錠

理解できない。

「なんでや……」

平次はぼそつと呟いた。
その場に力なく座り込み、両手で顔を覆った。
涙の温かさが伝わる。

「なんで謝んねん……」

部屋には平次の声と新一の荒い呼吸だけが響く。

静けさと共に平次を襲ったのは

哀しみと、怒り。

どうしようもない思いが
平次を苦しめた。

泣きたく、ないのに
涙が溢れて止まらなかった。

平次は部屋を出た。

新一の目が、覚めてしまったらいけないから。

「入るよ、新一……」

「平次居る？」

蘭と和葉が入った。

その部屋にいたのは新一だけで
平次の姿が見えなかった。

「あれ……？」

「蘭ちゃん！ウチちよつと探し行って来る。」

「うん。」

そう言って、和葉は走って出ていった。

蘭はそつと新一に近づく。

「ら……ん……」

「きゃ！新一起きてたの？」

「いま……」

「そっか……」

新一は熱のせいか、未だ気分が悪いらしく再び目を閉じた。

「大丈夫……？」

「ん……」

少し曖昧に聞こえた。
気のせいかもしれないのに、それだけで不安になった。

黙っていると、新一が話しだした。

「…なあ」

「え？」

「……。」

「なあに？」

「やっぱり…いい」

新一は自分の額に手をのせた。

「なんで話してくれないの？さっきだって…」

「うん…」

誤魔化さないで。

本当は言いたかったけれど、口をつぐんだ。

聞きたいけど、聞きたくない
そんな葛藤が渦を巻いた。

何か嫌な予感がある。

――嵐の前触れはすぐそこに来ていた。

もっと早く気づければ良かったのに。

蘭と新一は、その後会話することもなく

一日が終わった。

第36話

切願

朝、一番に入った知らせ。

それは灰原哀からのものだった。

『解毒剤が、完成したの。』

一本の電話で、見えていた闇に蓋を閉じた。

歓喜の声をあげる蘭とは逆に、新一は何かを考え込んでいた。

『大事な話があるの。すぐに病院に戻って。』

最後に放ったこの言葉が、離れない。

——閉じたはずの蓋も、所詮は『蓋』だっだ。

「蘭ちゃん。」

「和葉ちゃん！服部くんは？見つかって…ないの？」

「あっ…ううん、居るよ。」

和葉が急に表情を曇らせた。

「どうかした？」

「あんな……」

*

「平次！」

暗い書斎に平次は座っていた。

「和葉」

「こんなところに居たん……」

和葉はゆっくりと平次に近づいていった。
月明かりで、腫れ上がった目に気がついた。

「泣いてんの…?」

「お前に…関係ないやん…」

ぶっきらぼうに言う。

それでも和葉は微笑んだ。

「関係ないことなんてない…」

「はあ?」

「うち、あんたのこと好きやもん」

平次の顔が赤い気がした。

とか思っている自分の顔も、大分火照っている。

「な、に言っとなねん」

「好きやねん！！だから…」

一回言葉を切った。

そしてそつと平次を抱きしめた。

「あんたがそんな顔してると…抱きしめたくなくなるんよ…」

優しく、言った。

「あほ…」

「…結構。」

泣きそうになった。

平次の「あほ」と言った声が、震えていたから。

「聞くよ…なんでも。」

震えた。

それでも。

「俺…何なんやらなあ…」

「え？」

聞こえるような、聞こえないような声。

「親友とか、散々言うつとったけど…結局何も出来へんねん。俺は…」

「そんなこと…」

「大丈夫、て… たった一言が言えんかった…」

ぎゅうつと、髪をかき上げて握った。
悔しそうに、力を込めて。

「怖かったんや…。『大丈夫』が本当じゃ無くなる… そんな気がして…」

「平次…」

「嫌や…！あいつが死ぬなんて、ありえへんよ…！！」

あとからあとから、ぼろぼろ零れる涙が和葉にも伝わった。

人の涙を見ることが、こんなにもつらい。

和葉はさらに強く平次を抱きしめた。

第37話

暗示

強く、平次を抱きしめた。

しかし次の瞬間、思いきり突き放した。

「なんでアンタがそんな弱気になるん!？」

「……っ」

「らしくない!!そんなの、平次らしくないわ!!」

声を荒げた。

本当は、こんな責めるような言い方はしたくなかった。
優しく背を擦ってあげたかった。

でも、それじゃいけない気がした。

「…大丈夫…大丈夫や…」

「え…?」

「平次が言いたいこと、きつと工藤くんわかつとる。アンタが工藤くんにも出来てへんなんて…そんなこと絶対ない。」

ふ、と笑った。

思いきり突き放された平次はそのまま壁に寄りかかり、頭を抱えた。

「…和葉……」

「何？」

「…もう何も喋んなや」

「なっ…アンタなあ！」

和葉は怒りのあまり、すつと立って、怒鳴ろうとした。

しかしそれは平次の言葉によって遮られる。

「お前…俺のこと泣かせたいんか？」

少し潤んでしまった目を誤魔化すかのように、フイツと横を向いた。
そんな平次に微笑んだ。

「ええやん…泣いたって」

「あほ…」

平次は立ち上がり、無理にニツと笑って見せた。

「…好きな女の前で、いつまでも情けない顔出来へんわ。」

「…え…」

そっと和葉に近寄り、優しく抱きしめた。

「ありがと…な」

思いもしなかった言葉に、和葉は顔が緩んだ。
本当に嬉しかった。

「うん…」

そう返事をする、和葉は平次の背に手を回し少しきつめに抱きしめた。

*

「ウチ初めてやねん。あんな平次。」

話終えて、和葉は小さく笑った。

「でも、嬉しかった。あんな風に話してくれたこと、なかったから……」

そう話す和葉の横顔を見て蘭はクスツと笑った。

「そっか……で、服部くんはどこに？」

「あ……なんか眠たい言うて、書斎のソファで寝てしもた。」

「なんだ、早く伝えてあげたかったなあ」

「何を？」

キョトンとした目で蘭を見る。
蘭はさらにふふつと笑って続けた。

「あのね、新一もうすぐ治るんだ！解毒剤が完成したって、さっき連絡が入ったの！」

「ええ！？ほんまなん！？」

蘭の嬉々とした様子に和葉も歓喜の声をあげる。

この時は、すべてから解放されるのだと信じていた。

——甘かった。

そんなことを簡単に考えた自分が、憎い。

第37話

暗示（後書き）

平和書くの、本当に大変でしたー
∴（^ー^∴）

次回からは新蘭に戻ります。

第38話

理解

「なんだよ…それ」

新一は医者の中から吐かれた言葉に啞然とする。
哀までもが言葉を失っていた。

「君の体の三分の一は、君が服用した薬によって侵されている。だから手術をしなければいけない。」

「なんで…」

「私達はいくまでも、副作用を中和させるものを作っただけだ。侵された部分までは治すことができない…」

これ以上進行することはなくても、結局苦しみから解放されることはない。

「手術を受けるか受けないかは、君が決めなさい。」

医者はそう言い残し、去った。

「新一、いる?」

蘭達が病院に来たのはそれから二時間経ってからのことだった。

「おう…」

小さめに返事をした。

「どした？あ、お話何だったの？」

「うん…」

曖昧に返事をする、蘭がムツとした表情を作った。

「ちゃんと言っまで、帰んない」

「え…」

「言って！」

蘭は半ば怒鳴るように言った。

わあったよ…、と言ってため息をついてから、新一は話し始めた。

15分くらい経ったのだろうか。
もっとも、新一はこのたった15分が一時間くらい経ったかのよう

に感じていたが。

話し終えてちらつと蘭を見た。

しかし予想した表情とは違ったものを見せた。

「なあんだ、そんなことか。」

蘭は安心したかのようにふうつと息を吐いた。

「そんなことって…」

「だって、手術すれば治るんだよね？」

「そんな簡単なものじゃ…」

「治るんだよね…？」

ふと、蘭の顔が歪んだ。

——リスク。

蘭は既にわかっていた。

この手術のリスクが半端なものではないと。

世界初になる手術。新しい手術方法。もちろん、成功した症例はない。

副作用や生存率…そういったデータが全くない。

『人体実験』

そう呼んでもおかしくない。

わかっている。

けど、わからない。

「なんで…なんで何も答えないのよ…!!」

新一は黙ったまま俯いた。

「答えて…前みたいに、笑って…」

大丈夫って、言うて。

第39話

粗雑

蘭は気がついたら病室から飛び出していた。

途中、和葉達と会ったような気がしたが、呼びかけに聞こえないふりをして走った。

（自己嫌悪…）

乱暴にロビーの椅子に腰掛ける。

（あんな言い方したって、どうにかなるわけじゃないのに…）

涙が零れそうになった時、後ろから肩を叩かれた。

「蘭ちゃん…？」

ドアをノックする音が聞こえる。

今先の出来事で人と会ったのが極端に面倒になっていた新一は、小さめに返事をして布団に潜った。

「工藤……」

「何。」

かなりぶっきらぼう。
自分で言っていてよくわかる。

「あ、いや…昨日スマンかったなあって…」

「おう…」

さっきから目も合わない。

いや、わざと合わせないようにしているのかもしれない。

「なんや…工藤、お前具合そんな悪いんか？」

「…ん」

「ほ、ほんなら先生呼んでくるか？」

「…嘘」

その態度には、今までしおらしくしていた平次も怒りを見せた。

「なんつやねん!!お前!!」

「探偵だよ。」

「~~~~つ」

平次はガシガシと頭を掻いた。
訳がわからない。

「なんか、あつたんか」

その声をかけると、少し反応したように見えた。

「別に」

「や、あつたやろ。」

「ねえよ」

「誤魔化されへんで！」

「うるせえんだよ！！！出てけ！！！」

平次は驚いて目を見張った。

今まで聞いたこともないくらいの怒鳴り声だったから。

新一は思い切り飛び起きて、無我夢中に叫んだ。
しかし、表情はすぐにハッとしたものに変わる。

「あ、や……ごめん。」

そう言うと再びベッドに横になり、腕で額を覆った。

「ええよ。俺も悪かった。でも、聞かして欲しいわ。何も隠さんで」

なるべく優しく言った。

「嫌だ……」

「お前なあ……」

「……蘭が、全部知ってる。」

少し声が震えていた。

「お前の口からは言えんのか。」

「……。」

長い沈黙が続く。

最初に口を開いたのは平次だった。

「お前のこと、なんでもかんでも話して欲しいとは思わん。けど、ホンマにつらいときは言わなアカンで……」

「……え」

新一はちらつと横目で平次を見た。
らしくない言葉が、余計につらい。

平次の過度な友達思いがこんなにも嫌になるなんてことを、新一は思っていた。

きつと新一は、蘭と話をしていなければ平次に全てを話しただろう。

「簡単に言いやがって…」

蘭が出ていく前にした、あの表情が今でも頭に残ってる。

泣きたいのを、必死で我慢している顔。

もう、見たくない。

だから、本当につらくても

1人で頑張ろうと決めた。

「悪い、服部。一人に…して欲しい…」

「……っ。わかた…。ほな、また来るさかい…」

そう言って、平次は静かに病室を後にした。

「わりいな……」

新一は小声で呟き、再びベッドに潜った。

第40話

静寂

「蘭ちゃん？どないしてん…」

「和葉ちゃん…」

肩を叩いたのは和葉だった。

新一かもしれないと考えてしまったせいで、少しがっかりとした表情になってしまった。

「なんや、どないしてん？工藤くん…なんかあった？」

「……………」

「蘭ちゃん…？」

心配そうに顔を覗き込んだ和葉に、目も合わせずに蘭は首を振った。

「あたしも…わかんない」

「…え？」

「何が何だか…わかんないよ」

そう言って蘭は一筋、二筋と涙を零す。

「駄目だな…あたし…。強くなるって決めたのに…っ」

幾度も零れる涙が、手の甲を濡らす。
どうしようも、出来なかった。

今自分に何が出来なのか、考えても考えても
わからない。

——腹がたつ。そんな、自分に。

「帰る。」

もう、ここには居たくない。

「え！？ちょ、蘭ちゃん！？」

ここに居たら、考える。
嫌だ。

——嫌だ。

走って行ってしまった蘭を追いかけようと、和葉もまた走り出そうとした。
しかし、その瞬間手が掴まれる。

「あ……平次……」

「一人に……さしとき……」

平次はスルッと手を離し、側にあつた椅子に座った。

和葉は状況が理解できず、ストーンと隣に座った。

ただただ、
静寂が続く。

第41話

悲運

真夜中、蘭の携帯が鳴った。
眠れずにいた蘭はすぐに携帯を開いた。

「はい…」

『蘭か？俺…新一だけど……』

「しん…いち……？」

声が自然と震えた。

『ごめん…こんな時間に……』

「新一…しんいちい！！」

蘭は震える声を抑え、必死に名前を呼んだ。

そこに存在するものを、確かめるかのように。

「ほんとごめん……いきなりあんなこと聞かされたら怖いよな」

「え……？」

少し間があった。

それから、小さな声で続いた。

「話、ある。明日来れないか？」

もうこの時から予想はついていた筈だった。
覚悟が足りずに傷つくなんて、ばからしいと……思った。

病室に入るなり、新一は少し笑って蘭を迎えた。
それが無理にしたものだ、一目瞭然だった。

その表情が、すべてのことを暗示していた。
だから、何も言えなかった。

新一はゆっくりと体を起こして、蘭に向かって手招きした。

「指輪、持ってる？」

「うん…当たり前じゃない…」

そう答えた瞬間、新一は蘭の手を掴んだ。

重なった手の中に、硬い何かが入っている。

「なに……？」

まだ手が離れない。

「これ、はさ…」

言葉を濁す。

そこで気づいた。

新一の左手に、指輪がついていないことに。

無理矢理掴まれていた手を剥がす。

刹那、鈍い音と共に落ちる。

「どっ…こと…」

新一は前を見据えて、蘭は驚愕を隠せずに。

「蘭、俺と別れて。」

第42話

虚空（前書き）

遅くなってしまうてすみません。

活動報告にも書きましたが
小説の編集をしました。

内容は変えていませんが
文章を少し変えました。

前より幾らかは読みやすくなったと思いますので
興味があつたら覗いてやってください（＾－＾；）

第42話

虚空

「蘭、俺と別れて…」

答えは返らない。

蘭は落ちた指輪を拾いあげ、半ば強引に新一に押し付けた。

「やめてよ…そんなこと、冗談でも言わないで…？」

指輪を固く握る。

「冗談でこんなこと言わねえよ…」

その言葉に、蘭はキツと新一を睨んだ。
けれど、すぐに緩んでしまった。

涙が滲んで、必死に堪えた。

「なんで……っ」

——わかってる

「じめん……でもさ、」

——わかってる

「お前一人残して逝ったら……絶対後悔する。」

——新一は、いつだって……強い。
強くて、優しい。

だから新一の考えてることなんて、すぐわかる。

それはすく…

残酷なことだ。

「だから別れなきゃいけない」

もう、聞きたくない。

「蘭、その指輪捨てて…。俺のこと、忘れていいよ」

そんなこと出来るわけない。

「出来ないよ……」

私と交わした約束を、覚えていますか？

「……………」

目に溜まった涙を拭った。
どうしても今、泣いたらいけない気がして。

「ずっと傍にいてよ………」

こんなこと言って、きっと新一を困らせてしまうだろう。
決意を、踏み躪ってしまおう。

けれど、これだけは譲れない。

譲れなかった。

「蘭、俺は…お前を幸せにしたい…」

「幸せだよ…っ。すごく…すごく…幸せ。」

「でもそれは…ずっと続くって、決まったわけじゃない………だろ？」

やめて

「俺は、ずっと続く幸せを…蘭がずっと笑っていられることを願ってる。」

死ぬ準備を、始めないで。

抑えきれず、涙が零れた。

止めようと、するたび
苦しくなる。

その時、手が掴まれて

引かれた。

「愛してる……」

第43話

乱反射

矛盾している。

別れて、と言っておきながら
抱きしめた。

それじゃ駄目だと
わかっているのに

感情が邪魔をする。

「しん……いち……?」

名前を呼ばれて覚醒した。

そして自分を苛むものに反して
ゆっくりと手を解いた。

「ごめん…蘭……」

1人で頑張ると決めた。

それ、なのに

固く決めたはずだったのに

「……………っ」

俺は今、何をしようとした？

「ごめ……」

ただ謝って、俯いた。

声も

手も

震えてる。

きつと、蘭にはれてる。

手を思い切り握って、震えを止めようとする。

…それすらも、できない。

「……新——」

蘭が呼んだけれど、答えることは出来なかった。

このまま顔を上げたら、涙が溢れるんじゃないかと思っただから。

「新一」

呼び続ける蘭に
苛立った。

でもそれ以上に、そんなことを考えてしまう自分が、心底嫌だと思
う。

刹那、蘭が震える手を包んだ。

「……蘭……？」

冷たかった手が、だんだんと熱を持っていく。

何も言えない俺に、優しく

だから

辛かった。

「ね、新一。新一は…もっと我が儘になったって、いいんだよ。」

「え……？」

「一人で頑張ろうって、思わなくても…いいんだよ。」

蘭は《空》だ。

海よりも、いろんなものを映す。
すごく綺麗だけど、その綺麗さに時々目を逸らしたくなる。

その綺麗さに触れるたび

俺は

癒され

呪い

微笑み

恐怖を感じる。

今、この瞬間は
なんと表現したら良いのか
わからなくて

俺は

涙が出た。

第44話

決断（前書き）

最後だけ、編集しました。

この前読んでくださった方、申し訳ありません（<―>）

続きを書いていたら

二人がとんでもないことになってしまったので…（^―^；）

第44話

決断

涙の止め方を

知らなかった自分を

知った。

別に

泣くことが、いけないことだと思っ
ているわけじゃない。

それでも、この涙は止めなければいけ
ないと思った。

この涙は

今まで積み上げてきたものを

簡単に

壊すから。

だから。

「わり……目にごみ入ってさ……」

そう言って、拭って
必死で隠す。

少しだけ笑った。

蘭も笑った。

「……へたくそ」

少し表情が強張って、睨まれた。

「誤魔化すなら、もっと増しなこと言いなさいよ……」

「何言って……」

ほとんど無意識に、蘭の強い視線から逸らした。

その眼とは裏腹で、すごく優しい声が聞こえる。

「……悲しい時とか、辛い時にね、泣きたいって思うのは人間の本能なんだって」

「は……？」

「だから……」

言いかけて、蘭は繋がれた手を離して抱きしめた。

「泣きたい時は、泣いてもいいの……」

俺が

泣けないことを

蘭は知っている。多分。

だから抱きしめたんだと思う。

こうすれば、俺の泣き顔は

蘭には見えなくなるから。

「うん……」

泣きたかった。

泣きたかったけど
泣けなかった。

今まで

頑張っ
て

頑張っ
て

頑張っ
て

来て

来たから

崩し
たくな
かった。

「でもほんとに、違
うから……」

まだ手は解
かれない。

「新一の、そういう強がること……嫌いじゃない……」

「だから……っ」

反論しようとして、気づいた。

「でも……そんなの、いらない」

蘭の頬を伝う、それに。

俺は、蘭を泣かせることしか出来ない。

いつだったか『泣かせない』と約束し、

それから

何度泣かせただろうか。

「ごめんな、蘭」

「何……？」

《約束》は今からでも

遅くないだろうか。

それならば

俺は

第45話 自戒

自分を包む蘭の腕を、そつと解いた。

蘭の手に触れて

そして、薬指に在る指輪をゆっくりと外した。

器用に、綺麗且つ残酷に。

「しんいち……？」

新一の腕が力無く落ちた。

両者の指に、指輪は存在しない。

握られたものは、かつての輝きのまま

行き場を無くした。

「……これは枷^{かせ}だ。」

「え……？」

「蘭はもう……自由だから」

新一は未だ俯いた顔を上げない。

「どっぴつこと……？」

「この指輪は、ただ蘭を戒めただけだった。でも……もう解いた」

「……え……？」

「だから、泣くな……俺のせいで泣くのは、今日が最後……。さよなら、しよつ？」

新一が何を考えているのかわからない。

いつもそうだった。

一人で決めて

一人で戦って

一人で抱え込んで

なんでも一人でやろうとする。

わかるはずない。

「勝手に決めないでよ……!!」

「勝手じゃねえ」

「どこが！？意味わかんない！！」

新一が固く指輪を握った。

すごい力を込めていると、見ただけでわかる。

そんな新一に息を呑んだ。

「約束……だろ？」

約束

この言葉に、身体が勝手に反応した。

「『泣かさない、守る』って格好つけて……結局何も出来なかった。」

「違……っ」

言葉が出ない。

「でも、関係無くせばそれは成立する……わかるか？」

「わかんないよ……！！新一は……あたしの傍にずっといるって……
言ったんだよ……？」

綺麗な夕陽が、部屋に差し込んだ。

でもこんなの

今はただ
忌々しいだけ。

「最初から間違ってた。傍に居ながら泣かせないことなんて、出来

るわけなかったのに……」

「だからって……っ」

別れる方を選ぶなんて間違ってる。

なんて言うのは

自分の勝手なのだろうか。

「お前はいつも笑ってて。」

だったら、今だけあたしの自分勝手を許して下さい。

「新一が居なきゃだめなの……」

泣かない。

泣いたら、だめ。

「ねえ新一。あたし達、どうしてこんなことになっちゃったのかな
……」

新一は笑っていた。

「どうしてだろうな……」

私達は、きつとどこかで間違えた。

空は先の夕陽色が消え、すっかり闇色に光っていた。

暗い病室には新一が一人、座っている。

指輪を握った手を開いてただ眺めていた。

今日、自ら蘭を手放した。

後悔なんてしてない。

けど、自分に嘘を塗り重ねていく。

その事に苛立つて。

「くそ……っ！！！」

床に思い切り、指輪を叩きつけた。

カラン、カランと

音が虚しく響く。

「……………」

今更、どうしようもない思いが込み上げる。

あの時の選択が

蘭を

傷つけて

自分を

狂わせた。

突然、激しい痛みが襲いベッドに倒れ込んだ。

「……あ………」

耐えきれずに、声が漏れる。

手に入れたかったものの代償は
大き過ぎた。

痛みに思いが荷担して
重さを増した鉛が
躊躇なくのし掛かる。

その日は月明かりの眩しい
綺麗な夜だった。

第46話 風

「うん、いい天気。」

朝、蘭はカーテンを開け、呟いた。

空は色褪せ、心地の良い風が吹く。
夏の終わりを語っていた。

ふ、と微笑み窓を開けた。

「おはよう、園子」

「うん、おはよう」

新一と会わなくなつて、2週間が経つ。

「……ねえ蘭……新一くんのことだけど……」

「うん、もういいの」

こつ言つ日々が続いていた。

『もういい』なんて
本当は思つてない。

毎日、どこかで心が痛んでる。

「大丈夫だよ、園子。大丈夫……」

今日も、私は泣かない。

「蘭……」

涙で流して

すべて忘れようなんて思わない。

「さ、行こっか」

上手な笑い方は、忘れてしまったけれど。

数分歩くと、目の前にいた一人の女の子に気がついた。

子供らしい瞳を、欠片も見せない

私のよく知る女の子。

「哀ちゃん……」

女の子、哀は振り返り向き一礼した。

「園子、先行ってて。」

そう言って、哀のもとへと歩んだ。

「久しぶりだね、哀ちゃん」

「蘭さん……」

蘭は風に揺れる髪を耳に掛け、真摯に哀を見つめた。

「あなたと、工藤君のこと…聞いたの」

「そう……」

「もう二週間も会ってないんですってね」

「うん……」

哀は坦々として喋る。
蘭と目は合わない。

「だったら知らないと思うけど、工藤君、一週間ほど前から体調に変化が出てるの」

「それって……」

「良い方と思わないで」

そう言って哀はくるっと背を向けた。

「それだけ、伝えようと思って」

すたすたと歩き出す。

「ちょっと待って！新一は……」

ぴたり、と止まった。

「彼があなたに何を言ったか知らないけど、彼は……工藤君は、絶対にあなたに逢いたいと願ってる」

「え……？」

「あなたが最後に病院に来た日。あの日、うなされながらずっとあなたを呼んでた……」

哀と、目が合った。

「彼が不器用なこと、知っているんでしょ？」

笑った彼女を、
わたしはただ見つめた。

「でも逢えないよ」

吹く風に、髪が彷徨う。

「どうして？」

どうして？

それは

「新一はそれを望んでないからだよ」

例え願っていたとしても

きつと望んでなんかない。

「ありがとう哀ちゃん」

少しだけ歩いてから
小走りに園子を追いかけた。

第47話

兆

*

何も見えない。

暗い。

もうずっと、この暗い闇の中にいるような気がする。

でも暗いのは

自身が目を瞑っているからだ、今更ながらに理解した。

「……………君……………工藤君……………」

呼ばれた。

だから、目を開けようとした。

けど

簡単じゃなかったのは

この疲れた体のせいだと

言い訳した。

「……はい……ばら……？」

目をゆっくりと開けると、心配そうに顔を覗き込む哀がいた。

「大丈夫？」

「え……？」

「ううん、少し辛そうだったから」

新一は身体を起こそうとするも、まだ調子が良くないらしく出来なかった。

無理に起こそうとした新一を、哀はゆっくりとベッドに寝かせた。

「気分はどう？」

「大分良くなった」

「そう、良かった」

新一は、窓の真下にある棚に目を向けた。

そこには自分が投げ捨てた指輪が寂しく置いてある。

看護師か誰かが拾ったのだろう。

「……逢いたいんでしょう？」

突然発せられた、灰原の声に驚き、視線を合わせた。

「きっと彼女だって、そう願ってるはずよ。もう二週間も経つのに……いい加減仲直りしたら？」

振られたくなかった話題に少しだけ顔を歪ませた。

「別に……お前には関係ないだろ……」

「お節介だと思ってるなら、それでも結構よ。」

哀は手慣れた様子で、新一の食事の用意を始める。

「あなた、覚えてないと思うけど、二週間前倒れた時、ずっと蘭さんの事呼んでたのよ？」

「え」

「それと……ずっと謝ってた」

どろどろで、ほとんど液体のようなお粥を新一のもとへと運ぶ。

「まだ逢いたくないって言える？」

「誰も言っ
てねえだろ……んなこと……」

哀の手を借り、ゆっくりと体を起こした。

「少しでもいいから」とそのお粥を促される。

「蘭が俺と逢う事を望んでねえ。だから、逢えねえんだよ」

一口それを含んで、数回咳き込んだ。

哀は背中を擦りながら、少しだけ新一を睨む。

「馬鹿ね。もう少し我が儘になりなさいよ」

その言葉に、新一は辛そうに微笑んだ。

「我が儘、ね……」

『ね、新一。新一は…もっと我が儘になったって、いいんだよ。』

不意に蘭の言葉を思い出した。

＊

「待つて、蘭さん」

走りだした蘭を必死で呼び止める。

足が止まった。

「なに？」

蘭は振り向いて、微笑みかける。

「工藤君も、あなたと同じこと言ってた」

「え……？」

「蘭さんが望んでないからって」

蘭の髪を踊らせていた風が止みつつあり、次第に下へと垂れる。

「本当によく似てるのね。あなた達」

蘭に近づいていく。
ゆっくり歩いて。

「工藤君、体力が限界に近づいてるの。もうすぐ、手術の決断をしなくてはいけない」

「え……」

蘭との距離が

3メートルほどになった所で止まった。

視線が合う。

「きっと、あなたは……誰よりも工藤君の力になれる。工藤君だつて、こういう不安な時、一番傍にいて欲しい人は蘭さんだつて、思つてると思うけど?。」

私はね、と付け足して哀は肩をすくめた。

蘭も少しだけ。

「すごいな……」

「なにが?。」

蘭がクスクスと笑い出す。

「……ううん、なんでもない」

荒れたものを、潤した。

それがすごいという言葉だったけれど。

あえて、言わない。

「一つ聞いていい？」

「どうぞ」

「……新一の事、好きなの？」

そうだとしたら

嫉妬する。

私よりも新一を知ってた事を

恨めしく思ってしまう。

「そうかも、しれない」

「……そう」

だっ
たら

「じめんね哀ちゃん」

私は

たかさんの

新一の笑顔を知ることから

始めよう。

「あたしも新一が好きなんだ……哀ちゃんに、負けないくらい……」

そうやって

少しずつ、知ろう。

「……そんなこと、知ってるわ」

笑った蘭に

哀も笑顔で返した。

第47話

兆（後書き）

えっと

まずは展開が早すぎるのは、自分でよくわかっていますので
つつこまないで頂けると嬉しいです（＾―＾；）

それと、哀ちゃんのどろどろお粥は、料理が下手だったわけではあり
りません（笑）

新一君の体調への配慮たるものです。

新哀ばくなっちゃいましたが、最後は新蘭です。〇（＾－＾）〇

第48話 空想

「工藤君、どうだい？体調は……」

そう言つて医者は、特有のポーカーフェイスで入つて来た。
新一も素知らぬ顔で返す。

「まあまあ……です」

医者はその辺りにあつた椅子を手に取り、ベッドの側まで持つていく。そしてそこに腰掛けた。

「今日は、ちよつと大事な話だ」

いつもなら、入ってくるなりどうでもいいような冗談を言つたり、からかったりと、面倒だった。

しかしいつもと違うまじめな様子に、新一の顔も幾らか強張つた。

「手術の……ことですか」

「ああ」

緊張が走る。

「そろそろ決断しないとね。これ以上引き延ばすと、それだけ成功率が低くなる」

「……」

「別に今すぐでなくていいよ。明日、君のご両親が来る事になってるから……よく話し合って決めなさい」

明日、というのも十分早い話だ。
でもその分、追い詰められている事を瞬時に理解する。

「……いいです。手術、受けます」

その言葉に、医者は呆気にとられた顔をした。

それでも新一の表情は変わらずに強張っている。

「いいのか？」

「明日まで待ったところで、同じです。受けないと言っても父や母が許しませんよ……」

医者は少し考え込むようにして、真面目に新一を見た。

「……じゃあ、手術のことについては明日話す」

「……ありがとうございます」

悲しそうに笑った、その表情の

受け止める方法がわからずに

医者はそのまま病室をあとにした。

医者が出ていったのを確認すると、ふうとため息をついた。

死への恐怖が日に日に大きくなっていく。

自分でも感じ取れる体調の変化に怯えながら生きていくのは、正直辛い。

毎回眠るたび、これが夢であって欲しいと思う。

それもいい加減、馬鹿馬鹿しく感じるようになった。

「……………」

身体中に走る激痛も、もう珍しいものではなくなった。

誰かの傍で、すべて吐き出して、泣くことが出来たなら
どんなに楽だろうか。

そんな女々しい考えに苦笑して、再び眠りについた。

外はすっかり静寂な色に包まれた。
医者と話をしたのが午前中であつたのにも関わらず、新一は未だベツドの中で寝息をたてていた。

暗くなつた病室にノック音が響く。

「新一………？」

蘭が遠慮がちにドアを開けた。そして気まずそうに中を覗き込む。

「寝てる……の？」

内心少し安心して、そつと中に入りドアを閉める。

椅子に座るなり、顔を歪ませた。

最初は穏やかそつに聞こえた新一の呼吸が、今は荒く乱れて聞こえる。

顔色も、前と比べて大分悪い。

たった二週間、もつとも蘭や新一にとっては長いものであったが、その間にこんなにも変わってしまったことが、蘭の不安を掻き立てた。

「大丈夫だよね……大丈夫……」

嫌な考えばかりが頭に浮かぶ。

無意識なものだから、自分ではどうにも出来ず苛立って。

その時、ふと窓の側にあったものの存在に気づく。

ゆっくりと近づいて確かめた。

「え……これって……」

もう既に捨ててしまっただろうと思っていた、指輪。

少しだけ埃が被っていたけれど、そんなことは気にならない。

まだ新一の側にいた事が

とてつもなく、嬉しかった。

「ありがとう……」

指輪をつん、とつついて、優しく微笑んだ。

第49話

愚者

不意に手が滑り、指輪が手元から落ちる。

「わ、大変！」

さほど大きい音で落ちたわけではなかったため、ほっと胸を撫で下ろす。

ふと、新一に視線を向ける。

微かに反応したかのように見えた。

「新一？」

「……………っ」

驚愕した。

新一の肌には汗が滲み、荒かった呼吸も大分酷くなっている。

シーツを固く握りしめた、その様子は今までに見たこともないほどで、蘭は戸惑いと焦りを感じずにはいらなかった。

「新一っ!？」

「う……………っ」

「新一!！」

蘭の強い声で、新一がうつすらと目を開けた。

「え……………蘭……………？」

弱々しい声ではあったが、その声からは驚きがしつかりと感じ取れる。

けど、今はそんな事を考えている場合ではなかった。

「大丈夫!？先生呼ぶ!？」

「あ……………いや、平気。ちょっと変な夢見ただけだから……………」

「そっか……よかった……」

蘭がほっと息をついた。

新一はゆっくり深呼吸して、荒い呼吸を治める。

「なんで……」

「え？」

「なんで、蘭が……」

額にかいた汗を手の甲で拭いながら、蘭に問う。

「ああ……」と蘭が少し笑った。

「私もわかんない……気がついたら、なんでかここに来てた」

「そっか……」

蘭はストンと椅子に座る。

ちら、と上目遣いに新一を見た。

「違うよ新一。ほんとはね、新一に逢いたかっただけなの……」

「え……？」

へへ、と軽く笑った。

新一がゆっくりと体を起こそうとする。

軽く咳き込んでから、不安定に蘭を見つめた。

「なに？」

蘭が問いた。

刹那、新一がきゅっと蘭を抱きしめる。

力はそんなに強くない。

けれど、震えた手が新一の意思を告げていた。

「しんいち？」

「来んなよ……」

「え……？」

手に少しだけ力を加える。
蘭の肩に頭をもたれ、ふうと息を吐いた。

「離せなくなるだろ……」

新一の表情がわからない。
当たり前。顔が見えないのだから。

だけど、震えた新一の声がすべてを造った。

「新一……」

そつと新一の背に手を回し、優しく撫でた。

「ここ最近……ずっと体きついし、寝ても変な夢ばっか見て……辛かった」

「うん……」

「いつも必ずいる奴が……いなくて……嫌だった」

「うん……」

今、新一が泣いてるんじゃないかって、思う。

不安な思いを吐き出すのは、
いいこと

なのに

すごく切ない気持ちになるのは、
いけないこと？

「一人って、思ってたよりずっと……辛くて……」

「そうだよ。新一は馬鹿だよ……そんなの最初からわかってたこと、でしょ？」

そう言っていると、新一はふは、と笑った。

「馬鹿って……それは言い過ぎ……」

釣られて蘭も微笑み、

「ばーか……」

そう言った。

瞬間、

蘭に新一の体がずしりと沈んだ。

「しん……いち……？」

第50話

言訳

「どした……？」

「ごめ……なんか……」

それ以上言葉は続かなかった。

新一はぜいぜいと荒い呼吸を繰り返す。

「大丈夫だよ。今看護師さん呼ぶからね」

小さく震える新一をなんとか安心させようと、優しく声をかける。
そして蘭は透かさずナースコールを押した。

苦しそうに咳き込む新一の背を擦り、ただ看護師を待った。

「どうされました？」

「あ……」

入ってきた看護師は状況を理解したようで、すぐに医者呼びに行く。

「ちょっと下がって！」

蘭はそのまま病室の外へと出された。

とたんに手が震えだす。

どうしようも出来ず、その場にしゃがみ込みうずくまった。

30分程経って、ドアが開いた。「どうぞ」と促され、静かに入る。

そこには、酸素マスクを付けられ、苦しそうに顔を歪ませた新一が横たわっていた。

「工藤君ね、少し疲れちゃったみたいなの。安静にさせてあげてね」

そう言い残し、看護師は病室を後にした。
また何かあったら呼んでください、と医者もまた後にする。

それを見届けると、蘭はそっと新一に近づき、持っていたタオルで額の汗を拭う。
すると少しだけ、重そうに瞼を持ち上げた。

「蘭……？」

「え……あ、うん。起こしちゃったね」

「ん……眠ってないから……大丈夫」

そっか、と返事をし、新一の額に手を当てる。
やっぱりまだ熱い。

そう思つて顔をしかめた。

「ごめんな……せつかく来てくれたのに……」

新一の細い声が響く。

「あー！だから無理してたんでしょ！？」

ある不安を殺す。

そうしないと、新一を傷つけると思った。

「まったく、そうやって思つんだつたら早く治して元気になりなさいよねー……」

真剣に言葉を選ぶ。

傷つけない方法を、考えた。

「……なあ蘭……」

「ん？」

「治るのかな……俺……」

「え……？」

予想しない、その言葉に思わず声が漏れる。

新一は、咳き上げてから途切れ途切れに続けた。

「苦しいのに耐えても、耐えても………続いて………本当に元気になんのかなって……」

「治るよ。元気にだって、なる」

本当に思ってる？

本当にそうなるって

心のどこかでしか、思っていないんじゃないかな。

あたしだって、怖いのに
わかるわけ、ない。

「大丈夫」

これは新一へだけの言葉じゃない。

「ん……」

新一は返事をする、一度小さく呻いてそのまま目を閉じた。

眠っているのか、ただ目を閉じているだけなのか、わからない。

けれど

だから

それ以上、声をかけることが出来なかった。

そんなのただの言い訳で、

ただ

涙を堪えるのに必死だった、

それだけ。

制服のスカートの襜^{ひだ}がぐちゃぐちゃになるくらい、強く握る。

「泣かないよ……泣かないから……」

そしてぎゅっと唇を噛んだ。

第51話

境地

「じゃあ……行くね」

午前4時。今日はまだ平日であるため学校がある。
始業前に一度自宅に帰ろうと、蘭は席を立った。

ドアに手をかけたその瞬間、小さく呻く声が聞こえた。

「う……っ」

驚いて手を止める。

小走りに新一へと駆け寄った。

「新一？」

「……………っ」

とりあえず覚醒を促す。これがまたも夢のせいなら、醒まさせる事が一番だと確信したから。

「新一！」

声を張って呼ぶ。

その時、睨った新一の瞳に涙が浮かび、一粒だけ落ちた。

「！」

それはぽたりという音をたてて、枕を濡らす。

生理的なものかもしれない。

けれど蘭の胸を痛みつけるには十分すぎた。

「ん……」

新一がうつすらと目を開けた。
伝った涙の痕に気づき、指で触れる。

「あれ……？なんで……」

「……大丈夫？体、辛くない？」

涙の事は触れないようにした。
自身、忘れたと思った。

「平気………だけど」

「けど？」

新一は、涙を拭うために出した手で目を覆った。

「いや………なんでもない……」

そのまま手を上へずらし、額に当てる。
長く息を吐いてから、閉じていた目を気怠く開けた。

「ごめん蘭……なんか引き留めたみたいだな……」

ドアが少し空いているのを気にしたのか、申し訳なさそうに蘭を見る。

「ううん、大丈夫だよ」

心配しなくていいよ、と告げ優しく微笑んだ。

「また……変な夢見たの？」

蘭は再び椅子に腰をおろす。

「うん……」

半分目を閉じて、不味そうに目を逸らした。

「どんな夢？」

「……えっと」

出来ればあまり言いたくなかった。思い出すと、また苦しくなる。だから適当に言葉を濁した。

「言いたくない？」

「……出来れば」

「そっか」

そつと新一の汗を拭くと、にこりと笑って立ち上がった。

「じゃあ……また夕方に来るね」

「……………」

頭では了解していたつもりだった。

もう一生会えないのだと思っていたし、夕方にまた会えるのならそれだけでも幸せだと思った。

だけど

行動は嘘をつけない。

歩き出した蘭の動きが、止まる。

無意識に蘭の服を掴んでいた。

「えっ……」

驚いた顔で振り向いた蘭を見て、はっとした。

「あ……や、ごめん……」

ぱっと手を離れた。

甘えてる。

自分の都合の良いように、蘭を振り回してる。

思いが、自分を苛立たせる。

そんな新一に構わず、蘭は笑った。

「また……来てもいいんだよね……？」

「え？」

「うっん、来るから」

少しドアの方へ歩いて
くるり、と新一の方へ向き直った。

「仲直り！」

答えを確かめるように蘭の目はじいっと新一を見つめた。

「……ああ」

小さく返事をする。

目は合わなかった。

そのうち、カラカラとドアを開ける音がした。

パタン、と閉まる。

「泣いたらだめ……」

病室から出たすぐ後、蘭はその場に座り込んでしまっていた。
目に溜まった涙を流さないように、必死に上を向く。

限界だった。

先の涙が脳裏に映るたび、胸が痛む。

どうしてかわからない。

どうしていいかも、わからない。

せめて泣かないようにと、懸命に涙を沈めた。

第52話

相對

学校に行く振りをして、休んだ。

徹夜をしたことが辛かったからじゃない。
どうしても行く気になれなかった。

園子から来たメールもまだ返してない。
悪いな、とは思った。けれど

ＴＯ 蘭 大丈夫？

……なんて返せばいい？

こんなの、肯定も否定も出来ない。

ふ、と息を吐き、携帯を閉じた。

助けて。

行き場のない思いを、どうか。

なんとなく、酸素マスクを外した。
息苦しさは残ったけれど、口許くちもとの違和感が無くなったのにほっとする。

特に体を起こすわけでもなく、空を眺め雲を見遣った。なぜだか澄んだ青がやけに目につく。

唐突にドアが開いた。

「新ちゃん!」

「あ……母さん」

入って来た人物を、自身の声によって再度確認する。
その後ろには優作の姿もある。

「……父さん……」

呟くように言うと、優作は無言のまま微かに笑った。

「ごめんね新ちゃん。なかなか来れなくて……」

「いいよ。忙しいんだろ?」

そう言うと、有希子は苦笑った。

「もうすぐ先生来るみたい。話があるんだって」

「……ああ」

ゆっくりと体を起こす。

不意に視界が大きく歪んで倒れそうになった。見兼ねた有希子が手を差し出す。

大丈夫、と有希子の手を退けた。深呼吸を繰り返し、ベッドに寄り掛かる。

「体調……良くないのか？」

新一が落ち着いたのを確かめて、優作が声をかけた。

「いや……」

沈黙の後、やっと口を開く。

やっと言えたのは、これだけ。

悪い時機で再びドアが開いた。

「お揃いですか」

入って来た医者に、新一は一度だけ目を合わせたがすぐに逸らした。
医者は何か言いたげに新一を見た。しかし表情を変えずに向き直る。

「それでは手術についての話を……」

と、その後が続く科白に啞然とした。
そして沸々と怒りが込み上げる。

聞いてない。そんなこと。

訶^{こた}めた涙^{なみだ}声。

どうする事も出来ずに、

空虚に笑った。

第53話

選択（前書き）

活動報告にも書きましたが、
こちらにも再度書かせて頂きます。

▼ユーザネーム変更

進藤青蓮

←
篠原 柑那
シノハラ カンナ

第53話 選択

「そんな……どうして……っ」

有希子は手で口を覆うと、床にへたりと座り込んだ。

「私だけの判断ではありません。有能な医師を集め会議を行ったところ、このような結論に……」

医者は顔を歪めた。

酷な事実にも、言葉を失う。

『手術の成功率は30パーセント』

離れない。

「術中死の可能性も……考えておいてください」

そこに泣き崩れた有希子に、
深く俯いた優作。

この状況に、ただ空虚に笑った。
そうすることしか出来ない自分は本当に愚かだと、今更ながら思い知った。

「手術は一ヶ月後だ。改めて、工藤君。手術……受けるか？」

考えて。

この数分で決断しなければいけないのだ。

口を開きかけたとき、有希子が割って入った。

「手術をしなければ……息子はある程度のくらい生きられるんですか
……」

呟くように言った、その科白も静かな病室には響いた。

「有希子……お前何言って……」

「教えてください！わからない、なんてことないですよね!？」

遮って放った言葉は、とても強く。

睨むように見ると、医者は少し怯んだように言った。

「……このままだと、半年ほどかと……」

深長な言葉に息を飲む。
もう、時間がない。

「どうする、新……」

「え……?」

唐突に発した優作の言葉に肩を大きく震わせた。

「お前が決める」

その言葉は

投げやりでもなく、
押し付けでもなく、

だけど

恐怖に陥った。

「受けるよ。もちろん」

もう強がるのが癖になってしまっていた。

怖いのに、どうして？

どうして言えないのだろう。

どうして声の震えを必死に治めようとするのだろう。

「後悔……無いな？」

「ああ……」

そんなことわからない。

新一はベッドから足を下ろすと、よろめきながらもゆっくりと立ち上がった。

優作の手を借り正面を向いて、鋭い眼差しで医者を見つめた。

「お願いします……」

深く頭を下げた。

医者は何も言わず切なそうに笑った。

手術の細かい説明があるらしく、優作と有希子は医者に連れられ病室を出た。

一人残された新一はベッドに腰掛けていた。まるでそこだけが取り残されたかのように。

最近天気が良いすぎるのが、本当に嫌だ。

赤い空に、何の感動も覚えなくなった。

白い病室がだんだんと色付いていくのが、ただただ忌々しくて。

その辺りにあったものを片っ端から投げた。

赤　　を埋めたかった。

綺麗なものを、汚してしまいたかった。

それでも途中で手が止まる。

無意味だと気付いた。

無惨に散らばったものも染まるから。

「畜生……っ」

乱暴にベッドに横たえると、シーツを力いっぱい握りしめた。

第53話

選択（後書き）

自分の文章力の無さに泣けてきますー（。・Д・）

へたくそな文章ですが、もうあと数話で終わりますので
最後までお付き合い頂けたら嬉しいです（／・-・＼*）

第54話

乱雑

学校を休んでしまったこと、新一が知ったら自分のせいだと勘違いしてしまうかもしれない。

だから、制服に着替えて鞆を持って家を出た。
あたかも学校帰りのようであるかように。

病室の前で一度、自分の頬をパンと叩く。

深呼吸をして、ドアに手をかけた。

「ごめん新一！遅くなって……」

勢いよく入る。

しかし中に入って愕然とした。

ペンや時計、携帯までもが床に散らばっている。

ペンの蓋は外れたものがいくつも散乱していて、携帯は無防備に開いてしまっていた。

そしてその、落ちていた時計の針の進む音が聞こえるんじゃないかと思うほど、静かだった。

「（なに……これ……）」

引き締めた気が一気に緩んだ。

だから奥歯を噛み締めた。

ぐっと拳を作り、しゃがんでそれらを拾い集める。

ペンは一つずつ丁寧に蓋を閉め、時計が動いているか確認した。

貼ってあった写真は画鋐がびようから引き契ったあとと共に在る。掻くように集めた。

そして最後に、携帯を閉め、新一が横たえるベッドの横に置いた。

もうすっかり赤は落ち、黒へと変わろうとしている。

蘭はただそこに佇んでいた。

わずかな光が病室に差し、消えた。

「……来て」

前触れなく放った、新一の言葉が

響いて、

びくんと体が反応した。

カッン、カッンと靴の音がする。

そしてベッドの前で止まった。

音も止んだ。

少しだけ時間が経って

新一がゆっくりと体を起こす。

刹那

抱きしめた。

「え……新一？」

だんだんと力が強くなる。

「ねえ……」

「黙って……」

状況が理解出来ず、口籠った。

新一の体温が高く感じて、
言わなきゃいけないと思った。

「し、新一……」

「黙れって言ってるだろ……っ」

言えなかった。

新一の必死さに圧倒された。

声にしなくても伝わることを

考えて

そつと頭を撫でた。

触れるたびに

ぴくりと動いて、震える。

切なくなった。とてつもなく。

新一のさらさらした髪が、滲み出る汗のせいで額や首に張り付いている。

それをそつと払い退けた。

「具合悪いんでしょう？横になろ、ね？」

声を発しても、もう新一は何も言わなかった。

それどころか、自分を掴む手が緩んだ。

素直過ぎる行動に疑いを感じたが、そのままベッドへ押し込む。

そして、新一の手に触れた。

「あのね、知ってるの。全部聞いたんだ」

その声は静かで。

新一は蘭を見上げた。

「え……」

新一の熱の籠もる手に、蘭のひんやりした手が合って、温度がわからなくなる。

それが心地良くて、

嫌だった。

「……新一の思ってること、全部はわかんないよ。でもわかりたい
と思ってる」

熱い手が、冷えて

冷たい手が、熱を持つ。

理屈で考えれば当たり前だけど、

不思議でしやうがなかった。

「言葉で言わなきゃわかんないことって、いっぱいあるの」

蘭が目を逸らそうとしないから、前を向けない。

光が完全に閉じた。

闇同然な暗さが、痛い。

「こっち向いて。……ほんとのこと、言つてよ……」

蘭を傷つけるつもりなんてないけれど

今、口を開けたらそんなの簡単に忘れてしまいそうで。

だから、言わない。

気持ちは自分の中にだけ……

と

「……………」

無意識に顔が歪む。
無理だった。

本当は本音を

誰かに言いたくて

誰かに聞いて欲しくて

誰かに……

蘭に

自分を知って欲しかった。

それでも切り替えが上手くいかずに、

何も言えなかった。

「いいよ。今すぐじゃなくて、いいから……」

蘭の微笑みが
今唯一の安堵だった。

「……あのね、強さって弱さと逆だって思いがちだけど、そうじゃないの」

「え……？」

「強さと弱さって、どこか似てて……だから人間は二つを持ってるんだって」

強い人が、弱くなっても

弱い人が、強くなっても

なにも可笑しいことじゃない。

強さも弱さも保てるものじゃないから。

「……だからね」

工藤新一はそれでいいのだ、と

その目が言った。

新一に、思わず笑みが零れる。

こんな自然に笑ったのはいつ振りだろうと、考えたけど

窓からちらりと見えた星空に
邪魔された。

第55話

時間

天気良かった分、星がよく見えた。

それは窓のガラス越しにもわかるほどで。

「蘭……見て。すごい星……」

「わ、ほんとだ……」

蘭はそっと繋がれていた手を離し、窓へと近づいた。

「……綺麗？」

「え……？」

ふと、新一が切なげに笑みを作る。

「なんで……そんなこと聞くの？」

カラカラと窓を開けた。

「俺には……わかんないから……」

「……どうして？」

蘭の視線がこちらに向く。

風が音をたてて中へと入り込んだ。

「どうして……だろうな」

風が

蘭の髪をなびかせた。

同様に

新一の前髪を揺らす。

「いつの間にか、何も感じなくなった……。綺麗、ってなんなのかな……。わかんなくて……」

熱で火照った頬が冷えていく。

風が止まない。

「でもいつか……。俺が立ち上がった時……。その時は、綺麗だっと思いたい」

強く願ってる。

滑稽な事だけど、心から思ってることも確かだから。

「……どういう意味？」

虚しい風音だけが響く。

すぐ側の木がざあっと大きく撓^{しな}って、葉が数枚舞い込んだ。

「きゃ……」

蘭を叩くように入ってきた葉に驚き、窓を閉めようと手を伸ばした。

「……蘭」

「え……?」

「好きだよ」

窓がピシャリと閉まる。

「なっ……いきなり何!?!」

「いいから」

そう言つと体を起こし、ベッドから降りてゆっくり蘭のもとへ歩んだ。

顔にかかった髪を耳へ掛ける。

そして静かに口付けした。

「ちょ……つと……」

唇をそつと離すと、蘭は紅潮させて外方を向いた。

それを制するかのように、新一は蘭の頬を触れる。

「聞いて、蘭。俺はいつも……どこにいてもお前を想つてる……」

「え……？」

まっすぐな目に戸惑った。

「ずっと、愛してる」

どうしても、今伝えなかった。
心が再び離れてしまう前に。

「どう……いうこと？もう逢えないみたいな事言うの、やめてよ」

「……伝えたい時に伝えとかないとさ……」

新一は悪戯っぽく笑うと、蘭の額を人差し指で弾いた。

「顔真っ赤……」

「だっ、誰のせいだと……」

弾かれた額を両手で押さえた。
そしてぷつと頬を膨らませる。

「怒んなって……」

「怒ってないっ！」

そう言って怒る蘭が可愛くて、思わず笑ってしまふ。
蘭は「うー……」と唸って額を擦った。

「……もう遅いから、帰れ。下まで送るから」

時計を見る。

もう既に8時を回っていた。

「いない。」

「え？」

「平気そうにしてるけどばねだよ。立ってるの、辛いんでしょ？」

えいえいとベッドまで戻すと、肩を押して座らせた。

「無理はだめ。」

啞然とする。

そして、ばねだと言われたことに苦笑した。

「わあっ たよ……」

渋々ながらも返事をする、蘭は一笑して「じゃあね」と病室をあとにした。

第56話

幻想

ひたすらに黒い世界に立っている。

いや、なんとなく浮遊感がある。地に足がついている感覚がない。

そんなことを考えているうちに、何かに腕を捕まれた。

暗くて見えない。

無理に手を振りほどいて歩みを進めた。

上に、ずっとずっと上に、小さな白い点が見える。

あれは光だろうか？

思わず手を伸ばした。

しかし決まっただけいつもその瞬間、先に振りほどいた筈のものが再び腕に絡みつく。

それを引きちぎろうとすると、今度は逆の腕を締め、脚を締め、自身の自由を奪う。

巻き付くそれは段々と力を増して、ついには首もとを絞め上げた。

息が出来ない。
手足が痛い。

痛みに耐え、きつく閉じた目をこじ開けた。

今度こそ掴もうと、闇を掻くように上へ。

叫び声と共に手を伸ばした。

その声に反応したかのように脇からぞわぞわと黒い帯のようなものが上がってくる。

きつとこれが自分を苛んでいるのだと確信した。

あと少し。

帯は身体の至る所を締めた。

そんなの構わない。

しかしそんな意志とは関係なく、その帯は下へ下へと引きずり込む。

疲労した身体は、その力に勝てる訳もなく、再び闇へ沈んでいった。

光は視界から姿を消し、やりきれない思いから出来るだけの声を響かせた。

*

「う……」

目が開いた。
眩しい。

「夢……か」

いつも見る夢。

「くそ……何なんだよ、これ……」

荒い呼吸を整え、頬を伝った汗を拭った。

医者が言うには、これは精神的なものらしい。

手術前にこういう事が起こるのは、よくあることだと聞いた。

時期に治まると言っていたけれど、この夢が止む兆しなんてまったくなかった。

「新ちゃん！良かった、気がついたのね」

「え……？」

病室に入るなり、慌てて近寄って来た有希子に啞然と声をあげる。

「覚えてないか……新ちゃんね、昨日の夜から酷い熱で」

「へえ……」

覚えはない。

確かに倦怠感はあるけれど。

「もっと体力つけないとね。」

軽く返事すると、有希子は満ちた笑顔を向ける。

そして、見舞いでもらったりんごを一つ取るとさらさらと剥き出した。

夕陽に雲がかかり、空が少し暗くなった。

点滴のおかげですっかり気分の良くなった新一は、ふらりと中庭へ出た。

手持ちの本を適当に広げると読み進める。

「こんなところでも本なんだね」

唐突に聞こえた声に体がびくりと反応し、反射的に見上げた。

「蘭……」

名を呟くと、彼女は嬉しそうに一笑し

ストンと隣に腰掛けた。

興味の無さげにちら、と本を見て、
そしてまた真っ直ぐに前を見た。

「夢は……まだ続いてるの？」

「え……？」

「あ、いや……前変な夢見てるって言ってたから……」

蘭は不味そうな顔をして口籠った。

触れてはいけない話題だったのだと思ったのだろう。

「見るよ。なにも変わらない、おんなじ夢」

新一はすつと立ち上がり、一度伸びをしてそう言い放った。

そんな新一に呆気にとられ、蘭は思わず聞き返した。

「もう……大丈夫なの？」

新一もまた驚いたように蘭に振り返り、ふっと少しだけ笑った。

「大丈夫じゃねえよ」

その表情からは、何も感じ取れない。

言葉は謎となり、蘭の胸を締め付ける。

「でもこの夢はもう俺の一部で……」

「一部……」

雲はだんだんと厚みを増す。

暗くなる空が、変に気持ちを掻き立てる。

「夢の最後を見たい。だからかな……」

夢の、最後。

蘭は一言ずつ丁寧に呟いた。

「なにそれ」

「……なんでもねえよ」

謎は謎のまま。

新一が歩きだしたから

後ろ、ちよつと離れた所を

ついた。

第57話 意識

月の見えるように、頭を少し傾けた。

眩しくて目を細める。

手術まであと三日。

朝は鳥が鳴き、

昼は人々の声で溢れ、

夜はそれらが一気に静まり、本来の静寂を取り戻す。

変わらない毎日。

でも昨日とは違う今日。

深夜零時。

それらが再び繰り返される。

そんな世界とは裏腹に、

自分の心は日ごとに変わったから

困惑は連鎖した。

ふと、蘭は新一の顔を覗き込んだ。

心配になったのだ。

ここに来て一時間ほど経つというのに挨拶程度の会話しか交わしていない。

「ねえ」

堪えきれずに、口を開いた。
しかし反応がない。

「新一！」

だから今度は強めに。

すると、新一の体はびくりと揺れ、ゆっくりこっちを向いた。

微小に、はっとした表情を作り、その後瞬間的に笑みを漏らす。
その笑顔はあまりに不自然で、違和感さえ感じた。

「どうしたの？」

「何が」

ほら、やっぱり

言わない。

そんなんで、どうもしないわけないのに。

それとも本当に自覚がないのか？

蘭は起こされている新一の体を無理矢理ベッドに押し込んだ。

さすがに新一は驚いて抵抗する。

「や……めろって！！俺は大丈夫だから……」

新一は肩に触れた手を思い切り払い退けた。

蘭の手は乱暴に弾かれ、宙を舞う。

鋭い目。

鋭利で、それでどこか怯えたような目は

まっすぐに蘭を見つめていた。

「え……」

無意識に声が漏れた。

それにより新一は覚醒し、怯んだように不味そうな顔し、少しだけ俯いた。

重い空気が首を締める。

息が出来ないような感覚が気持ち悪い。

「……ごめん」

「し、新一が謝ること、ない」

思い詰めたような新一の顔に戸惑った。

新一は悪くない。

なのに。

出した大声が引き金となり、新一は激しく嘔^むせ出した。

蘭は慌てて背を擦る。

「何が大丈夫よ。全然じゃない」

半分怒りを示すような声色で声掛ける。

「ごめ……」

咳が治まりかけた所で新一が口を開けた。

苦しさで、涙が薄く浮かんだ瞳をゆらゆらさせて、すぐるように蘭に触れた。

何度か呻いて、ぜいぜいと音のした呼吸を落ち着かせようと試みる。

しかし中々上手くいかないようで、再び激しく咳き上げた。

「ちょっと、大丈夫!？」

蘭はナースコールへと手を伸ばす。

だが途中で止められた。

熱を持って汗ばんだその手は、精一杯の力で彼女の腕を捕らえている。

「いい……いいから……」

大丈夫、そう続けて一度大きく息を吸った。

ようやく完全に咳は治まったものの、口に当てた手を外さず固く目を閉じた新一には、やはり心配になった。

「お水買ってくるよ。薬、飲んだ方がいい」

蘭は捕まれた手を外し、一度病室を出た。

嫌な汗をもう片方の手で拭い、蘭がいなくなったのを確認してから、

口を覆った手を外した。

手の平にべったりと張り付いた、赤い絵の具のような、それをぎゅっと握りしめる。

汗が次から次へと滴り落ちた。

新一は再び目を閉じ、手の甲を目頭に当て、ぱたりと仰向けにベッドへと倒れ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0813v/>

あなたを愛する人

2011年11月17日20時04分発行